
KANSAI OPEN FACTORY REPORT rec2022.

LOCAL KNOWLEDGE SHARE
地域を越えて伝播する

KANSAI KANOSEI

多色なKANSEI（感性）が
KANSAI（関西）の
KANOSEI（可能性）を拓く

Makers of KANSAI

OPEN FACTORY

本紙の位置付け/

関西の地域一体型オープンファクトリータイムライン表	4
関西に広がる地域一体型オープンファクトリーMAP	5
関西の地域一体型オープンファクトリー紹介	6
RENEW	6
千年未来工芸祭	10
DESIGN WEEK KYOTO	14
大正・港オープンファクトリー	18
てぬぐいフェス	22
みせるばやお	26
こーばへ行こう！	30
DESIGN WEEK TANGO	34
FactorISM	40
貝塚オープンファクトリー	46
CRAFT VILLAGE	52
SGストリートNARA	58
黒江るるる	64
その他取組紹介	
(FAct Eat kadoma、リアル播州織、KAIMAKU)	70
KNOWLEDGE SHARE	72
HUMAN VISIT	74

本紙の位置付け

関西(本事業においては、「関西」を福井県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県の2府5県と定義する)では、中小企業が主役となる地域一体型のオープンファクトリーが各地で誕生している。これらオープンファクトリーを地域で一体となって取り組む中で様々なイノベーションが生まれ、それらを創出する鍵となるキーパーソンが存在する。

本紙においては、関西各地の取組内容やその特徴、キーパーソンを紹介するほか、共に取組を支えるCO-LEADERSや事務局も紹介する。また今年度令和3年度調査においては「ナレッジシェア」をテーマとした各地の優良アクションやそれらを共有する仕組みの考察、「テクニカル・ビジット」をテーマとした、大手企業等を中心とした外部リソース(メーカー、旅行会社、ベンチャー企業、デザイナー等)を実際に現地に牽引する実証調査も行った。これら調査概要についても紹介する。詳細については下記報告書をご参照。

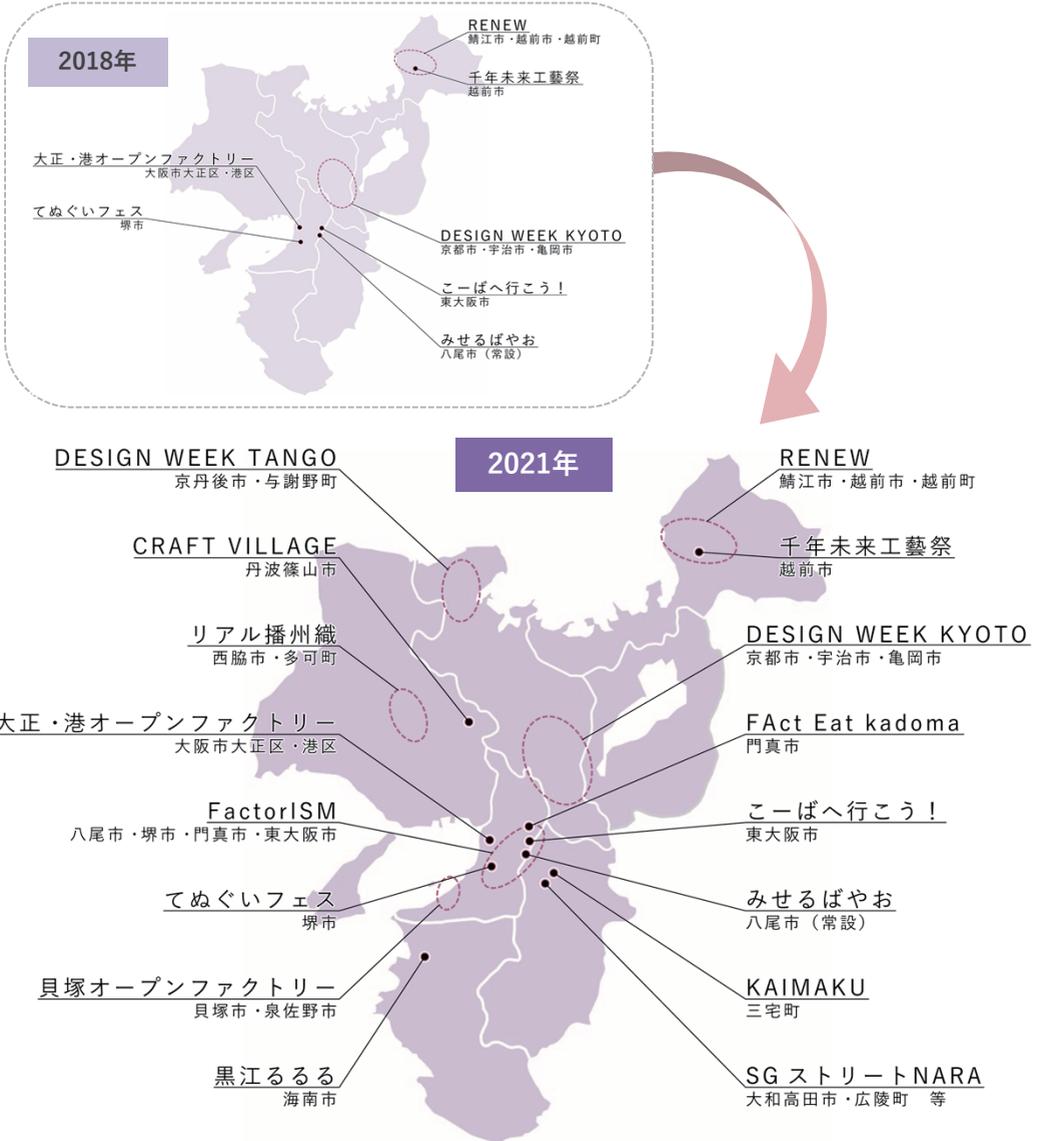
《令和3年度関西の地域一体型オープンファクトリーを発展させるテクニカル・ビジット及びグッド・イミテーション実証調査報告書》

関西の地域一体型オープンファクトリーのタイムライン表

名称	1月-3月	4月-6月	7月-9月	10月-12月
RENEW(福井県)				●10月頃
千年未来工藝祭(福井県)			●8月末頃	
DESIGN WEEK KYOTO (京都府)	●2月頃			
DESIGN WEEK TANGO (京都府)			●6月頃 (年間を通しての活動へ移行予定)	
大正・港オープンファクトリー (大阪府)				●11月頃
てぬぐいフェス (大阪府)			●8月頃	
みせるばやお (大阪府)	常 設			
こーばへ行こう! (大阪府)				●11月頃
FactorISM (大阪府)				●10月頃
FAct Eat kadoma (大阪府)			12月頃 (次回開催時期未定)	●
貝塚オープンファクトリー (大阪府)				●11月頃
CRAFT VILLAGE (兵庫県)				●11月頃
リアル播州織 (兵庫県)				12月頃●
SGストリートNARA (奈良県)			●6月頃 (次回開催時期未定)	
KAIMAKU (奈良県)			●8月頃	
黒江るる (和歌山県)				●11月頃

本タイムラインは過去の開催履歴に基づき作成しております。時勢等により開催時期が変更となる可能性がありますので、詳細は主催者にご確認ください。

関西に広がる地域一体型オープンファクトリーMAP





RENEW

福井県鯖江市、越前市、越前町

開始年：2015年
開催期間：例年10月頃 3日間程度
主催：RENEW実行委員会
参加企業：約70社
来訪者数：延べ3万人



Basement 取り組みを支える屋台骨



RENEW事務局長
村上 捺香 氏



RENEW事務局
西山 ほゆ 氏



RENEW事務局
山田 美玖 氏

Trend Setter

仕掛け人



新山 直広 氏

TSUGI LLC. (合同会社ツギ)代表社員。1985年大阪府生まれ。2009年福井県鯖江市に移住。応用芸術研究所を経て、鯖江市役所在職中の2013年にTSUGIを結成。デザイン・ものづくり・地域といった領域を横断しながら、地域や地場産業のブランディングを手がける。

●連絡先

TSUGI LLC.

〒916-1222 福井県鯖江市河和田町19-8

TEL 0778-65-0048

CO-LEADERS

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリーの企画・運営を担う中核的存在

実行委員長 谷口 康彦 氏

有限会社谷口眼鏡 代表取締役社長。福井県眼鏡協会 会長。RENEW立ち上げ期より、「持続可能な地域づくり」を強力に推進してきた。

RENEW 前事務局長 森 一貴 氏

フリーランスのプロジェクトマネージャー。1991年山形県生まれ。2015年福井県鯖江市に移住。「社会に自由と寛容をつくる」がコンセプト。

あかまる隊

県内外の約60名からなる、RENEWと産地のサポーターチーム。SNSの運営や工房見学ツアーのコーディネートなど、RENEWと産地を広く支える。



受賞アワード

2019年 総務省ふるさとづくり大賞 総務大臣表彰(団体部門)

2019年 日本デザイン振興会 グッドデザイン賞受賞

2020年 総務省ふるさとイベント大賞優秀賞(地域活性化センター会長表彰)

2020年 国土交通省地域づくり表彰最高賞(国土交通大臣賞)

2021年 第11回地域再生大賞(東海・北陸ブロック賞)

2021年 FBCかがやき基金 かがやき大賞

共につくろう 変わりつづけるものづくりのまちを

Features (特徴)

～常に新しい取り組みを～

「RENEW (リニュー)」は、福井県鯖江市・越前市・越前町で開催される、持続可能な地域づくりを目指した工房見学イベント。

会期中は、越前漆器・越前和紙・越前打刃物・越前筆筒・越前焼・眼鏡・繊維の7産地の工房・企業を一斉開放し、見学やワークショップを通じて、一般の人々が作り手の想いや背景を知り、技術を体験しながら、商品の購入を楽しむことができる。

また、RENEWは「更新する」という意味から名前をつけているため、毎年新しい取り組みを続けている。

Topics

～逆境をチャンスと捉えたRENEW2021～

RENEWに参加したことをきっかけに、29社が工房見学やショールームを立ち上げている。

RENEW2021は、コロナ禍の影響により、2021年10月開催予定を2022年3月に延期。当初の会期期間には、特設オンラインショップを開設したり、これまで会期中に他社の工場を見に行くことが出来ていなかったことから参画企業同士限定でプレッシャーを実施したことで、互いに新たな刺激を得ることが出来た。まさに「雨降って産地固まる。」という想いのもと、逆境をチャンスと捉え、地域のつながりを深め、改めて持続可能な地域づくりを見つめ直し、準備を進めたことでより深みのある「RENEW」となった。

Future (今後の展望)

～産地を起点に広がるプロジェクト～

RENEWの原点は、産地としての危機感を持っている人たちが集まり、活動を始めたことである。

通年型の産業観光プログラムへの投資や事業承継を支援するプロジェクト構想などを進めている。

Innovation (効果・創出)

～「若くて元気な産地」というイメージが着実に浸透～

RENEWに参加したことをきっかけに、工房ショップを立ち上げた企業は、29社にのぼり、産地のイメージづくりにも大きく貢献している。産地企業の機運醸成が実現したこと、地元民の郷土愛が高まったことが大きな成果である。

最近では、全国のプレイヤーを集める「まち/ひと/しごと」をはじめとしたプロジェクトや、ものづくりに携わる企業とものづくりを志す若者が出会い、互いを知り未来への関係性を育む「産地の合説」、潜在的な移住者へPRする「移住エキスポ」もRENEWと共に開催しており、これまで約14名が取り組みに関連して移住している。

2020年にはサポートチームとして「あかまる隊」を結成。現在は60名近くが参加、半数は県外のサポーターで学生が大半だが、社会人も含まれるなど、RENEWをきっかけにつながった人と人の輪は、着実に広がりつつある。そしてRENEWの活動は、美大生等を中心に全国的にも注目され、会期中は多くの美大生がエリア内を練り歩く。

また、2020年は福井のものづくりを紹介する「産地の赤本プロジェクト」や、商品開発プロジェクト「RENEW LABORATORY」も実施。

さらには「ててて協働組合」主催の“作り手”、“伝え手”、“使い手”を繋ぐマーケット「ててて往来市 TeTeTe All Right Market」が同日開催されるなど、この産地がずっと続いていくように、より多くの人々に福井のものづくりを知っていただきたいという想いと取り組みから醸し出された魅力が、外部との新たな交流に繋がるまさにイノベーションの苗床となっている。



参画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

地域未来牽引企業

株式会社龍泉刃物、株式会社西村プレジジョン

はばたく中小企業
小規模事業者300社

株式会社龍泉刃物、株式会社漆琳堂、株式会社ポストクラブ

関西ものづくり新撰

株式会社龍泉刃物、有限会社 オプト、デュオ



千年未来工芸祭

福井県越前市

開始年：2018年

開催期間：例年8月頃/ 2日間程度

主催：クラフトフェス実行委員会

参加企業：約130社(2019年)

来訪者数：約1.1万人(2019年)



Basement 取り組みを支える屋台骨



事務局
橋本 康央氏

福井県越前市役所 産業政策課



事務局
石田 卓也氏

福井県越前市役所 産業政策課



アドバイザー
永田 宙郷氏

TIMELESS LLC.代表

Trend Setter

仕掛け人



内田 裕規 氏

株式会社ヒュージ 代表取締役。越前市 越前和紙の里・旧今立町育ち、福井を拠点に様々なデザインやブランディングを手がける。文化創造拠点「FLAT project」や工芸の未来へ橋を架ける「CRAFT BRIDGE」をオープン。

●連絡先

株式会社ヒュージ

〒915-0225 福井県越前市別印町2-51

TEL 0778-42-8205

CO-LEADERS

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリーの企画・運営を担う中核的存在

“越前和紙組合” 瀧 英晃 氏

伝統工芸士。内装材メーカーでのテキストイルデザイン等の商品開発、デザイン事務所業務を経て、株式会社滝製紙所に入社。

“越前内刃物組合” 戸谷 祐次 氏

伝統工芸士。越前打刃物の伝統を守りながら、工業デザインを導入し時代を先取りした感覚で打刃物に取り組む若手打刃物職人の貴重な存在！

“越前箆筒組合” 小柳 範和 氏

伝統工芸士。三代続く小柳タンス店の次男として生まれる。現在、越前箆筒の伝統技術を継承しながら、『木』『鉄』『漆』という素材を活かした型にはまらないモノづくりを日々探求している。



会場・施設



メイン会場となるAW-I スポーツアリーナ



プロジェクションマッピングの様子

CoNEXTion（共につながる）

Features（特徴）

「モノづくりのまち」越前から工芸の魅力を発信

越前市では、越前和紙・越前打刃物、越前箆笥（たんす）という長い伝統と歴史を有する3つの産品が今もなお、まちの文化・生活を支えている。千年未来工芸祭は、現代を生きる若者たちに作り手の技や製品、人柄に触れ、工芸や手仕事を身近に感じてもらうとともに、次世代への継承のきっかけづくりを目指すイベントである。

コア・バリューであるCoNEXTionとは、「繋がり」という意味の“Connection”をもとに「共同で次の次に動かそう」という意味が込められている。世界に誇れる「モノづくりのまち」越前市から工芸の魅力を発信していく。

Innovation（効果・創出）

産地間のつながりと交流が生む新たな工芸の魅力発信へ

参加企業同士の連携として、例えば、打刃物のケースを箆笥屋が作るなど、業種を超えた事例も生まれている。

従来、市内3産地（越前和紙・越前打刃物、越前箆笥）については、横の交流は少なかったが、千年未来工芸祭という場の存在により、新しいつながりが生まれている。

実行委員長は、若手職人から毎年交代で選ばれており、若い世代の交流にも実現。また、千年未来工芸祭は、B to Cを意識したイベントとなっており、一般の消費者やファンと触れる機会が生まれているため、職人たちの意識改革にも繋がっている。

これは自社にアンテナショップを持っていても、一般客がふらりと立ち寄るような機会は少ないという地域課題を解決する機会ともなっており、千年未来工芸祭に参加することが、普段はかかわりの少ない客層に出会える貴重な機会となっている。

また、コロナ禍の影響もあり、2020年は、ハイブリッド同時開催、2021年はオンラインのみでの開催となったが、参加企業もコロナ禍の中での開催に合わせHPのリニューアルなど、見せ方を工夫する動きが広がるなど、参加企業が互いに変化への対応を触発しあうきっかけとなった。

また、北陸工芸の祭典「GO FOR KOGEI 2021」と連携し、「工芸の時代、新しい日常」をテーマに取り組みながら、周辺地域とさらに面となって北陸を海外へ発信する原動力を担うなど、当事業単体としての取組だけでなく、さらなる広域連携の可能性を体現している事例と言える。

Topics

TNCP2021 | 若手職人 チャレンジ作品発表

越前市伝統工芸三産地の若手職人が集まり、自らのアイデアで製作した作品を実際にユーザーに手に取ってもらうTNCP2021(Thousand, Next Takumi, CoNEXTion, Project)を企画。お客さんの声や、産地の未来を担う若者の意識醸成や課題発掘の貴重な機会になるという思いから取り組んだ、2021年からの新しい試み。未来を担う若手職人の今後の活躍への期待が高まる場となった。

Future（今後の展望）

「裾野」のさらなる拡大と地域ブランディング

千年未来工芸祭というイベントの認知度向上を継続して目指している。2021年はリアル開催は中止となったが、準備を進めていたオンラインコンテンツにて開催。越前の伝統工芸を360° VR映像で楽しめるコンテンツの提供や、伝統工芸にまつわる音と映像を用いたパフォーマンスコンテンツを提供。

また、「CoNEXTion」をキーワードに、世界各地で活躍しているデザイナーやクリエイターと共に、様々な視点からディスカッションする等、オンラインツールを活用しながら、越前の可能性を探りつつ、地域ブランド価値向上につなげている。



参画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

地域未来牽引企業

株式会社龍泉刃物

はばたく中小企業
小規模事業者300社

株式会社龍泉刃物

関西ものづくり新撰

株式会社龍泉刃物

がんばる中小企業
小規模事業者300社

株式会社ポストクラブ

DESIGN
WEEK
KYOTO
SINCE 2016

OPEN
YOUR
SIGHTS
2016

DESIGN WEEK KYOTO

京都府京都市、宇治市、亀岡市

開始年：2016年

開催期間：例年2月頃/ 1週間程度

主催：（一社）Design Week Kyoto実行委員会

参加企業：約50社

来訪者数：1万人以上



Basement 取り組みを支える屋台骨



事務局リーダー

北林 佳奈氏

COS KYOTO株式会社 取締役



デザインチーム

佐藤 恵月氏

デザインオフィス WA-plus 代表



編集・翻訳

大久保 彩氏

編集者・翻訳者

Trend Setter 北林 功 氏

仕掛け人



一般社団法人Design Week Kyoto実行委員会 代表理事
COS KYOTO株式会社 代表取締役

地場のモノづくり産業のグローバル展開サポートや人材育成、文化交流事業や学びのツーリズムを通じて、自律・循環・持続する心豊かな社会構築に挑む。平成28年より、モノづくり現場での交流を通じた創造的地域づくりにも取り組む。

●連絡先

一般社団法人Design Week Kyoto実行委員会 事務局
〒600-8846 京都府京都市下京区朱雀宝蔵町34 Umekouji MARKEet 3階
TEL 075-874-2718

CO-LEADERS

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリーの企画・運営を担う中核的存在

京都信用金庫 理事長 榊田 隆之 氏

多様な人たちの交流の場であるDESIGN WEEK KYOTOから、人と人が繋がり、そこから気付きやイノベーションが生まれていく。京都にそのような豊かなコミュニティを創造していくことをミッションとする。

DWKメンバーズ

年間を通じて、モノづくりを軸として異分野の人々が交流し合い、お互いを高め合う会員制コミュニティ。セミナー受講やワークショップなど、交流を軸にお互いに様々な刺激を受け合っていく仲間が集う場である。DWKのクリエイティブなコミュニティに年間を通じて参加し、共に京都を盛り上げていきたい！という方に向けたメンバーシップである。



PARTNERS 様々な形で運営をサポート

PLATINUM PARTNER



京都信用金庫

GOLD PARTNERS



京都をより クリエイティブな街に

Features (特徴)

モノづくり技術と感性が織りなす創造都市

DESIGN WEEK KYOTO は、京都のモノづくりの現場をオープンにし、国内外から訪れるさまざまな人との交流を促進することで、新たなモノやコトを創出している。長年の歴史の中で培われた職人たちの技術や感性と「訪れる人」との出会い、交流により、新たなアイデアやコラボレーションに繋がることで、京都をより創造性あふれる街へと進化させる。例年2月の会期中以外にも、年間を通じて様々な活動を展開しており、工芸技術を活かしたクラフトソンやトークイベント、セミナー等を開催している。

Topics CRAFTTHON クラフトソン

2017年より開始。日本各地から集まった多種多様なクリエイターらがアイデアを出し合い、京都の工芸と融合し新しく画期的なサービスやプロダクトを開発していくプロジェクトである。「クラフトソン」は「クラフト」×「ハッカソン」の造語である。例年夏から2月頃までの短期集中で、ワークショップによる工芸等の理解、事業アイデアの立案・支援者の獲得等までを行う。工芸に関わる人材の増加のみならず、これまで3件の新事業や新製品の誕生に繋がっており、DESIGN WEEK KYOTO と平行して京都のイノベーション創出を支えている。

2021年は「積極的脱線-シテンを変える、ミライを変える」をテーマに開催。

Future (今後の展望)

”オープンファクトリー”から”オープンハウス”へ

コロナ禍の影響もあり、オンラインでのイベントを拡充。開催方法は状況に応じて工夫を重ねており、アジア圏を中心とした海外とのオンライン交流も進めている。工場・現場だけでなく、農場や研究所など、地域の様々な主体が通年で交流し合う「オープンハウス」を目指す。

見せられるところはどんどんオープンにすることで、さらなる交流やつながりの拡大が期待される。現在の開催エリアは、亀岡・京都・宇治地域、そして丹後地域に広がっており、京都府内全域での交流促進を図っていく。

Innovation (効果・創出)

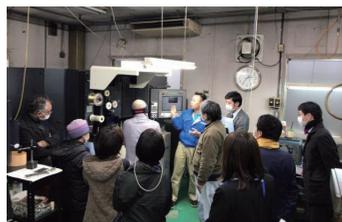
「経験」と「自信」から生まれるイノベーション

DESIGN WEEK KYOTO に参加することで、参加企業同士の業種を超えた会話や交流が生まれている。会期中は互いに訪問し合うことが出来ないことから、「今度、遊びに行きたいですか」をキーワードに、期間外で自主的に交流する機会を持つことを奨励している。そうした交流をきっかけに、「一緒に何かに取り組みたい」という想いが芽生えている。

DESIGN WEEK KYOTOの醍醐味は、多様な出会いやつながりから始まる展開である。既存の組合や取引関係にとらわれず、新しい取組やチャレンジに積極的になることが特徴で、昨年も参加企業同士のコラボレーションとして「分解可能なコントラバス」が完成。さらにはその成果物に別の参加企業が加わり、「漆と螺鈿(らでん)を施した分解できるコントラバス」へと進化するといったイノベーションへと繋がった。

さらには外部デザイナーとの連携による自社ブランドの開発など DESIGN WEEK KYOTOで得た「気づき」と「出会い」を形にすることで、そうした「経験」が「自信」に繋がり、自社全体のブランディングや認知度の向上につながっている。

こうした成功事例の積み重ねによって、参加企業の自主性も育まれており、さらなるイノベーションにつながる新たなサードプレイスとして機能する場となっている。



参画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

地域未来牽引企業

アテック京都株式会社、
株式会社キャストム、
株式会社ナンゴ

関西ものづくり新撰

株式会社ナンゴ

経済産業大臣賞
(第41回京焼・清水焼展)

株式会社陶莨

大正・港オープンファクトリー

大阪市大正区、港区

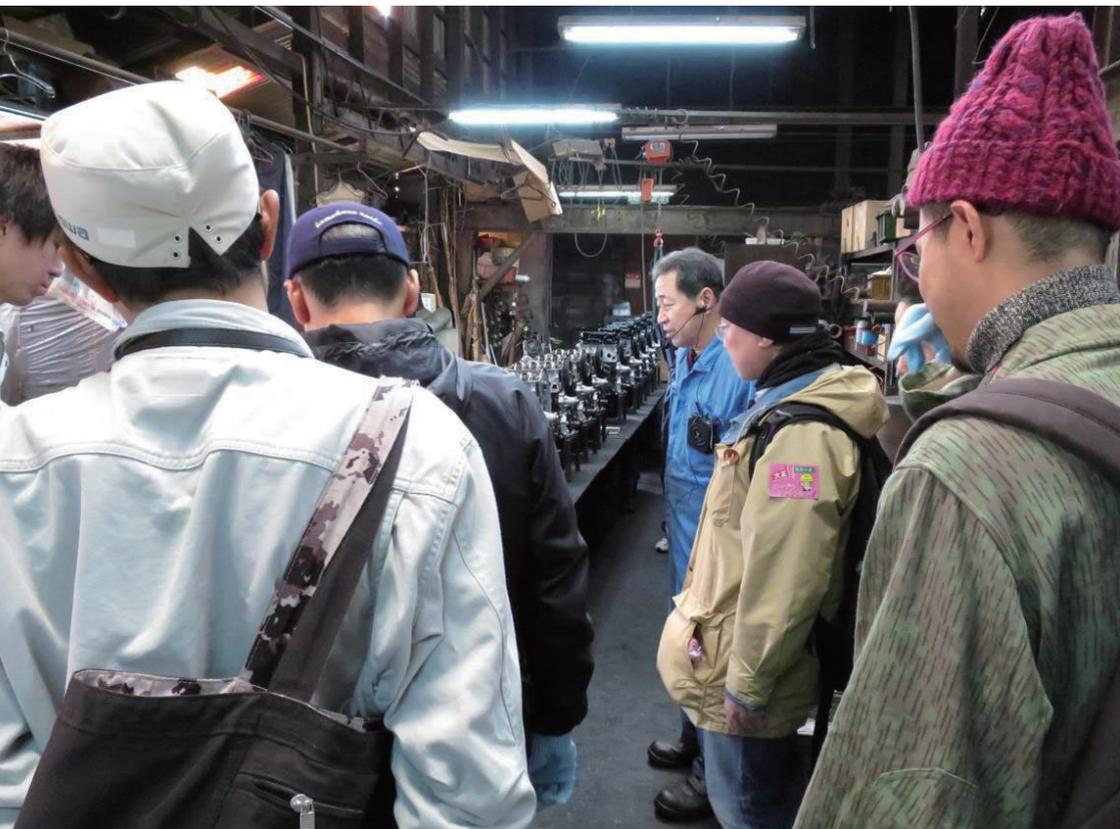
開始年：2015年より

開催期間：例年11月頃/2日間

主催：大正・港ものづくり事業実行委員会

参加企業：約40社

来訪者数：約150人



Basement 取り組みを支える屋台骨



中村 和也 氏

中村工業株式会社
専務

機械化が難しく、人の力に依るところが大きい、直径80mmを超えるような太径のロープ加工を得意とする中村工業(株)において、専務を務めている。同社は、大正・港ものづくり事業実行委員会の主要メンバーとして、工場見学を積極的に受け入れ、同氏は工場見学の講師を務める等、子ども達にもものづくりの魅力を伝えている。



山本 忠氏

山忠木材株式会社
代表取締役社長

Trend Setter 近藤 高史 氏

仕掛け人



大阪市港区 産業振興担当課長。
2007年、大阪市区役所初の工業担当係長に就任。西淀川区役所、大正区役所等勤務を経て、2019年4月から港区役所勤務。これまで、ものづくり企業と行政が連携する「西淀川区工業活性化研究会」、「大正・港ものづくり事業実行委員会」を通じ、まちの活性化を公民連携の手法で進めている。

●連絡先

大阪市港区役所

〒552-8510 大阪市港区市岡1丁目15番25号

TEL 06-6576-9986 (代表)

CO-LEADERS

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリーの企画・運営を担う中核的存在

大正・港ものづくり事業実行委員会

大正区及び港区のものづくり企業と区民との交流やものづくり企業のネットワーク形成とともに、区外へも大正区及び港区のものづくりの魅力を広げ発信し、ものづくり企業の活性化を目指すため、民間企業9社と支援機関3機関、両区役所で組織し、オープンファクトリーをはじめとした事業執行の意思決定を行っている。



実行委員長 木幡 巖 氏

(株式会社木幡計器製作所 代表取締役)

「錨印」ブランドのブルドン管圧力計を、112年前の創業時から変わらず一貫して製造する老舗圧力計専門メーカーの七代目。自社工場内に、IoT・ライフサイエンス分野のスタートアップのためのものづくり支援拠点 Garage Taisho (ガレージ大正) を開設。大正・港オープンファクトリーを運営する官民連携組織である大正・港ものづくり事業実行委員会の委員長。



国内、輸入木材から住宅新建材、住宅設備機器などの販売だけでなく、社内で木材の加工も行っている山忠木材(株)の代表取締役社長。販売するだけでなく、木の素晴らしさ、さらには地元大阪の木についての啓もう活動も活発に行う。また、地域の人に集まってもらうために社内にサロン「たろうのみせ きごころ」を立ち上げ、活用してもらうとともに、年に一度は「きごころサロンまつり」を開催している。



南 仁 氏

有限会社南歯車製作所
代表取締役

工業の世界において欠かすことができない歯切り加工の中でも、長尺軸への歯切り加工やスプライン加工、傘歯車加工において、他社ではできないオーダーに応じる技術を有する(有)南歯車製作所の代表取締役。社内の後進育成にとどまらず、大正・港ものづくり事業実行委員や大正工業会青年部においても、ものづくり人材の裾野拡大につなげる活動に尽力している。

ものづくりの力を結集して、 地域の課題解決へ

Features (特徴)

行政と民間が自ら「考動」する集合体

大正・港オープンファクトリーは、エリアの人口減少を背景に、エリアの魅力を外部に発信するとともに、地域住民が自らのまちに愛着を持ってもらうことを目的にスタート。行政主導ではじまったものの、民間企業も同じ目線・熱量で共に企画実施可能な関係性が構築されている点、すなわち「行政色が濃いにも関わらず民間企業も『やらされ感なく』継続している」ことが非常に特徴的である。

さらにはまちの魅力発信を兼ねていることから、地元商店街等も訪問ツアー先に組み込み、地域一丸となって取り組んでいる。なお、会期中以外でも修学旅行生を対象とした見学ツアーなど、ものづくりの現場を外部に開くことを実践している（コロナ禍以前では、約150名/年を受け入れ）。（※）2021年度は2022年2月に開催予定であったが、翌年度5月に延期。

Innovation (効果・創出)

「ローカル・カンパニー・プライド」による地域課題解決へ

主催者の大正・港ものづくり事業実行委員会では、オープンファクトリーの礎ともいえる拠点型ものづくり体験イベント「大正ものづくりフェスタ」を毎年4～5ヶ月かけて企画している。本取組は2013年にはじまり地域企業の主体性を育ててきたが、「どうせなら現場(工場)も見せよう」という自発的な声からオープンファクトリーの取組に繋がった。参加企業は現在約40社で、区内の企業の関心も非常に高く、事業を通して企業間のネットワークも着実に拡大している。行政がツアーを企画し、参加企業が当日の体験・見学メニューを考える際、毎年異なる参加企業同士でチームを組む。情報交換することで交流が生まれ、区内の企業間ネットワークが拡大していく。さらにオープンファクトリーを通して、自らを地域にアウトプットする出力先が出来たことで、徐々に「自分事」として活動するようになり、企業の地域に対する愛着（「ローカル・カンパニー・プライド」）も育まれていく。

大正・港オープンファクトリーの原点は「課題解決による地域貢献」である。本取組を通して業種・業界を超えた企業関係性が構築され、地域企業が悩んでいた若手社員教育の共同実施に繋がったり、TOPICSに記述のコロナ禍での地域医療機関の困りごとを解決する商品開発を短期間で実現するなど、取組を継続することで生んだ「繋がり」が、結果的に地域課題を解決することが可能なイノベーションの苗床となっている。

今後は同地域が他地域と繋がりを紡いでいくことで、新たなイノベーションが生まれることを期待したい。

Topics りびんぐラボ大正・港の発足

医療、工業、福祉の関係企業が連携し地域課題の解決をめざす「りびんぐラボ大正・港」のスタートは、2020年1月。大正区は大阪市24区内で最も人口が少なく、高齢化も進んでいる。少子高齢化の顕著な大正区がこの課題を解決できれば、他の自治体でも活用できるひとつのモデルケースになるとして、「ものづくりのチカラ」で健康医療に係る様々な研究・実証を行い、未来の地域健康へフィードバックすることを目指す。

コロナ禍においても、地域医療機関が「被覆具」不足に困った際、本取組を通して25時間で企画・製造が実現し、解決を生んでいるなど、今後の成果も期待される。

Future (今後の展望)

多様な交流でさらなる飛躍へ！

前身となる大正オープンファクトリーは2015年に始まり、関西エリアにおいて先駆者といえる。取組の数々は他地域に多くの刺激を与え、関西における他地域の新たな取組の誕生、外部資源の流入によるコラボレーション(Garage Taisho, Minato等)にも繋がった。

今後は地域内での連携はもろんのこと、地域外とも積極的に交流を図り、新たな「大正・港」の魅力発信の手法を生み出していく。



参画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

地域未来牽引企業

株式会社大波機械製作所、
株式会社木幡計器製作所、
成光精密株式会社

はばたく中小企業
小規模事業者300社

株式会社木幡計器製作所

大阪ものづくり
優良企業賞

株式会社大波機械製作所、
株式会社木幡計器製作所、
鈴木合金株式会社、
有限会社南歯車製作所

大阪テクノマスター

成光精密株式会社、中村工業株式会社、
西村鐵工所、有限会社南歯車製作所





てぬぐいフェス

大阪府堺市

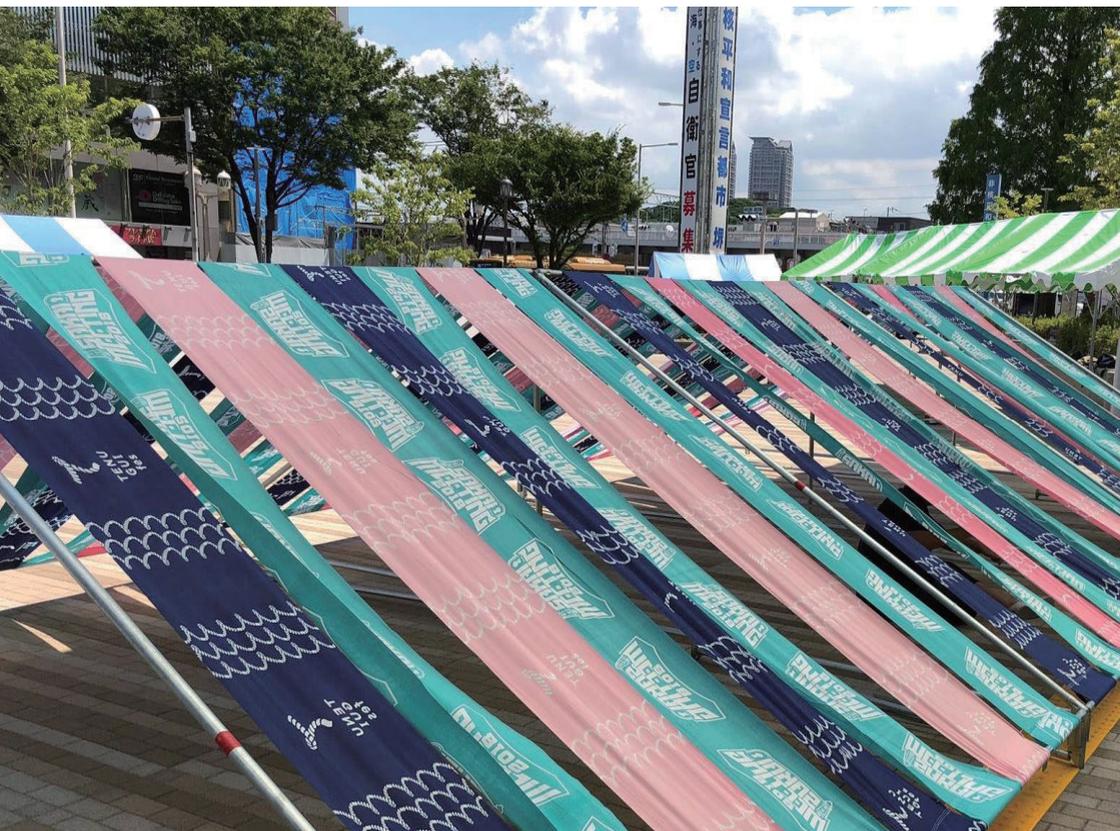
開始年：2017年より

開催期間：例年7～8月頃/ 1日程度

主催：堺注染和晒興業会・てぬぐいフェス実行委員会

参加企業：約10社

来訪者数：約5千人



Basement 取り組みを支える屋台骨



実行委員長

宮本 基広 氏

株式会社スタジオ・ワット
代表取締役



渉外幹事

角野 孝二 氏

角野晒染株式会社
代表取締役



広報部長

中尾 弘基 氏

株式会社ナカニ
代表取締役

Trend Setter

仕掛け人



和継会

注染和晒（ちゅうせんわざらし）興業会の若手経営者や後継者ら12人でつくる親睦団体である「和継会」がてぬぐいフェス実行委員会を形成している。実行委員は30代がメインの若手であり、委員長は毎年、和継会で持ち回りとなっている。

●連絡先

てぬぐいフェス実行委員会

<https://tenuguifes.com/organizer/organizer/>

Email: info@tenuguifes.com

CO-LEADERS

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリーの企画・運営を担う中核的存在

てぬぐいフェス実行委員会

てぬぐい産地の製造会社から、企画会社まで有志によって構成されたメンバー。日々活発に意見を交わしながら、産地のこれからについてそれぞれが熱い想いを持っている。



浪華本染め

2019年に「浪華本染め」が、伝統的工芸品産業の振興に関する法律に定める伝統的工芸品として指定された。

浪華本染めは、模様手拭を量産化する目的で、明治時代に大阪で開発された日本固有の染色法。一般に注染と呼ばれており、繊細な図柄や鮮やかな発色が特徴で、この染色法を応用したゆかたが評判を呼び全国に広まった。差し分けやぼかしなどの技法を用いて表裏両面から染めるため、風合いのある染め上がりになる。現在は、手ぬぐい、ゆかたのほか、日傘やアロハシャツ、コースターなど各種日用品に用途が広がっている。

てぬぐい産地の未来をつくる

Features (特徴)

てぬぐいが主役になる祭り

大阪府堺市は、手ぬぐい・ゆかたの産地であり、今も地場産業として多くの工場が残っている。てぬぐいは、地域のお祭りやイベントなどには欠かせない「脇役」である。「てぬぐいフェス」は、いつも脇役のてぬぐいが「主役」になる祭りとして開催。

伝統的な和小物としてだけでなく、新たなイメージの商品や、使い方の提案など、てぬぐい産地の挑戦や作り手の顔が見えるイベントとして企画した。当初は、注染和晒という業界全体へのイメージも薄かったが、フェスを通じて内外の人に、業界を知ってもらう機会にも繋がった。

※2019年にはてぬぐいの染め方の一つである「浪華本染め」が伝統的工芸品に指定された。

Topics

コロナ禍でも想いを繋ぐ「てぬぐい」

2020年、2021年の「てぬぐいフェス」は、コロナ禍で中止になりつつも、様々な活動を展開。協力を予定していた「梅田ゆかた祭2021」もコロナ禍で中止となったが、生活を支えている医療従事者、エッセンシャルワーカーの方々への感謝の気持ちをこめて、メッセージを伝える取り組みに協力。青色を基調とした、金魚をモチーフとしたてぬぐいを制作し、夏の涼を届けながら大阪梅田から「ありがとう」の想いを繋いだ。

Future (今後の展望)

他地域との連携拡大による相乗効果へ

他地域のオープンファクトリーではオンラインを活用したPRや広報活動にも力を入れており、今後、「てぬぐいフェス」にも取り入れていきたい。参加企業の中には、インスタライブを活用したPRを既に行っており、こうした取組を広げていくことが重要である。

他の産地と交流することで、運営上の様々なノウハウも吸収できる。これまで福井県鯖江市の「めがねフェス」にも参加してきたが、今後はさらに他の産地・イベントとも連携しながら、魅力的なイベントに磨き上げていく。

※2021年は、日本工芸産地博覧会など他のイベントへ参加する企業もあり、2022年以降の活動に向けて、各々が活動する年となった。

Innovation (効果・創出)

「見せる」ことによる自己変革と自社ブランドの構築へ

注染和晒の業界は、分業体制という構造もあり、取引関係の枠を超えたつながりができにくいこともあった。だが、フェスの企画・運営に携わることで、専門学校や地域外の様々な業種、団体とのつながりが形成されるきっかけとなっている。

2019年の「てぬぐいフェス」では、数社がコラボして、クラウドファンディングも活用、新しい商品開発にもつながった。「てぬぐいフェス」に参加したことで、自社のブランド構築を始める企業も出てきているなど、経営者自身の意識も着実に変化してきている。

毎年、参加企業の中には、従業員総出で、「てぬぐいフェス」へ参加し、業界や地域を知ってもらうことに注力している企業もあり、意識改革は経営層のみならず、ものづくりに関わる現場社員にも波及している。

産地を見せることは、非常に重要であり、外部に見せることを意識することで、自社の変革にもつながる。例えば、堺市の補助金を活用して、自社のショールームを立ち上げた企業があったり、他の産地とのコラボとしてめがねフェス（福井県鯖江市）に参画しているデザイナーと連携を始める企業があったり、自社製品のブランディングのために様々なアワード（大阪製ブランドなど）にチャレンジする企業が出てくるなど、「てぬぐいフェス」に関わったことをきっかけに「発信」の重要性に気づき、生まれる行動が、様々なイノベーションを生み出す原動力となっている。



参画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

はばたく中小企業
小規模事業者300社

株式会社ナカニ

大阪製ブランド

角野晒染株式会社 「優柔『纏』」
株式会社武田晒工場 「さささ 和晒ロール」
竹野染工株式会社 「Oo[ワオ]」





みせるばやお

大阪府八尾市

開始年：2018年8月より

開催期間：常設

主催：株式会社みせるばやお

参加企業：約130社

累計来訪者数：約6.6万人(2022年2月末時点)



Basement 取り組みを支える屋台骨



みせるばやお 役員
山田 紘也氏

株式会社ビーダッシュ
代表取締役社長



みせるばやお 館長
荒木 宏介氏



後藤 伊久乃氏

八尾市魅力創造部
産業政策課長

Trend Setter 松尾 泰貴 氏

仕掛け人



株式会社友安製作所 ソーシャルデザイン部担当 執行役員

元八尾市職員。「みせるばやお」の立ち上げに尽力。ものづくりのまちである八尾を広く知ってもらおうと、子どもたちにもものづくりの楽しさを伝えるワークショップや、企業間の交流を促進するためのイベントなどを実施している。地方公務員アワード2019を受賞。

●連絡先

みせるばやお

〒581-0803 大阪府八尾市光町2-60 リノアス8F

TEL 072-920-7128

CO-LEADERS

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリーの企画・運営を担う中核的存在

みせるばやお理事・役員メンバー

2018年5月8日に官民連携によりコンソーシアムである「みせるばやお」を立ち上げ。2020年8月3日に事務局機能強化、持続可能なコミュニティづくりのため、コンソーシアムを残しつつ、株式会社みせるばやおを設立。



みせるばやお

<代表理事>

錦城護謨株式会社

代表取締役社長 太田 泰造 氏

<副代表理事>

大阪糖菓株式会社

代表取締役社長 野村 しおり 氏

<理事>

ラピス株式会社 代表取締役 乾 真治 氏

株式会社平井製作所 代表取締役社長 平井 隆之 氏

株式会社たくらみ屋 代表取締役 森本 繁生 氏

アベル株式会社 代表取締役社長 居相 浩介 氏

KISSA ZEROICHI 代表 武内 春樹 氏

受賞アワード

2019年 総務省ふるさとづくり大賞 団体表彰（総務大臣表彰）

2020年 国土交通省地域づくり表彰（特別賞 日本政策投資銀行賞）

2021年 イノベーションネットアワード（優秀賞）

誰もがいつでも気軽にクリエイティブを!!

Features (特徴)

ものづくりのまち八尾を世界に発信

「見せる場」と「魅せる場」という2つが名前の由来である。出会いが加速する場を創出することがメインテーマであり、「シェアリングから生まれるイノベーション」を目指している。

みせるばやおの機能としては、2つ。1つは、子どもたちがワクワクできるものづくり体験を提供すること、もう1つは企業間のコラボレーションを創出する場である。企業間連携においては、様々なコラボ企画や商品開発、イベント等を数多く生み出している。参画は会員制を採用しており、約3割は八尾市外の企業（北は東北、大手企業等も参画）で構成されている。

Topics

常設のみせるばやおが「支える」FactorISM

FactorISM（ファクトリズム）は、大阪府内の八尾市、東大阪市、堺市、門真市の4地域にまたがる広域連携型のオープンファクトリーである。

FactorISMは、常設型のみせるばやおが機能しているからこそ成り立つ事業。初開催の2020年12月の際には、みせるばやおがメイン会場に、翌年2021年の開催時にも総合案内会場として利用され、日頃から企業の垣根を越えて繋がることを「当たり前」とする文化が生み出す推進力がFactorISMの原動力の一つとなっている。

Future (今後の展望)

広域連携を活かしてさらなる「苗床」へ

ネットワークの拡大という意味で、関西の他所のオープンファクトリーとの連携や交流を通じて、横のつながりを強化していく。実際に昨夏にはRENEWと参画企業同士の交流勉強ツアーを実施。オープンファクトリー同士で連携することで、上手く関西の魅力を発信していきたい。オープンファクトリーも各地で多様化し、それぞれが競合する関係ではなく、互いに上手く連携できる関係を築きたい。

工芸系のデザイナーが工業製品とコラボするなど、従来はなかった発想で新しい展開が生まれるイノベーションの苗床となることを目指す。

Innovation (効果・創出)

圧倒的なコラボ実績が生み出す相乗効果とネットワーク

地域企業によるローカルイノベーションが数多く生まれており、プロジェクトの実績は80件を超える。（2021年1月時点）

木村石鹸×友安製作所による生活雑貨「LOMA」など、コラボ商品が実現した例も多い。コラボ商品だけでなく、「ローカル・ナレッジシェア」という観点で、会員企業が「IT道場」を通じて、情報通信に関する技術・ノウハウを共有することで、受発注プロセスの効率化にもつながっている。

みせるばやおに参加することで、従来は関わりがなく、存在さえも認知していなかった近隣企業との会話やネットワークが形成されている。

みせるばやおで生まれたコラボ商品も、隣接しながらも従来は全く関係がなかった企業同士によるものが多い。また、みせるばやおでは、経営陣だけでなく、若手同士の交流も重視しており、多層的なネットワーク構築を目指している。企業同士が気軽に交流や相談ができる関係づくりを重視している。「あの会社とできるなら、うちの会社にも…」という良い競争心が刺激されて、参加企業のネットワークも着実に増えている。

こうしたローカルイノベーションが注目され、オープン当初から2022年2月末までにのべ98件の視察を受けている。

また、最近では、大学生とみせるばやお内の企業がコラボレーションしてワークショップイベントを開催するなど、学生とのコラボレーションの機会も増えてきている。



参画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

地域未来牽引企業

アベル株式会社、株式会社オーツー、柏原計器工業株式会社、木村石鹸工業株式会社、錦城護謨株式会社、株式会社光伸、株式会社友安製作所、株式会社中田製作所、株式会社藤原電子工業、山本ビニター株式会社

はばたく中小企業
小規模事業者300社

株式会社アーテック、株式会社STG、大阪糖菓株式会社、株式会社オーツー、柏原計器工業株式会社、株式会社光伸、谷元フスマ工飾株式会社、株式会社友安製作所、株式会社ニシムラ、藤田金属株式会社、山本ビニター株式会社

ものづくり日本大賞

株式会社アーテック、アベル株式会社、株式会社中田製作所、富士電子工業株式会社

こーばへ
行こう!

こーばへ行こう!

大阪府東大阪市

開始年：2018年

開催期間：例年10～11月頃/ 1～2日間

主催：東大阪市

事業実施主体：こーばへ行こう！実行委員会・一般社団法人東大阪ツーリズム機構

参加企業：15社

来訪者数：約3,200人



Basement 取り組みを支える屋台骨



こーばへ行こう！
実行委員会 事務局担当

足立 克己 氏

一般社団法人
大阪モノづくり観光推進協会



こーばへ行こう！
事務局長

田中 恵美 氏

株式会社盛光SCM 総務



こーばへ行こう！
事務局スタッフ

白木 ありす 氏

株式会社盛光SCM
コーポレートコミュニケーション

モノづくりをもっとオープンに！

Features (特徴)

「こーば」と「住民」をつなぐ場所

東大阪市は、住工混在地域であり、町工場と住民が近い場所で暮らしている。町工場と住民が上手く共存していくことが重要なテーマである。

こーばへ行こう！は、モノづくりのまちである東大阪の町工場が中心となって、モノづくりの楽しさを発信し、「こーば」と「住民」を繋げるための取組である。モノづくりを中心とする「工業」だけでなく、「商業」も取り込んだ地域全体での活動を目指している。現在、全体の企画やディレクションは、(株)盛光SCMが担当しているが、他の参加企業との分業や大学機関とのコラボも徐々に進みつつあり、今後さらなる拡大が期待される。

Innovation (効果・創出)

地域企業がまとまることで自体が新たな付加価値を生む

こーばへ行こう！へ参加することで、参加企業それぞれが互いに良い刺激を受けながら、新しい事業展開やビジネスモデルの構築に取り組むといったモチベーションの向上につながっている。

オープンファクトリーに参加したことで、大学や商業施設の家具製作や照明開発など、様々な商品開発依頼といった波及効果が出ている。地域企業としてまとまることで自体が新しい付加価値の創出につながっている。

工夫として、こーばへ行こう！には、近隣の大学からも多くの学生が参加しており、授業の一環ともなっている。若い世代がモノづくりの現場に触れる機会は限られており、学生へのインパクトは非常に大きい。

そうした延長線上として、結果的に参加企業への就職を決める学生も出るなど、ソフト面での好影響も出てきている。リクルート面でも新たな付加価値を生んでいる。

周辺自治体には、様々なモノづくり企業の集積地が形成されており、地域を飛び出した広域連携の視点も取り入れながら、さらなる躍進につなげていく。

また、2020年には、こーばへ行こう！参加企業が5社程度であったが、2021年には大きく規模を拡大し、15社の工場が参加した。その背景はこれまでの商慣習等のしがらみに囚われず、TEAM東大阪としてまちの魅力を改めて伝えたいという想いを、第一回からブレずに発信し続けたことで、地域に信念を共にしたい「同志」が集まったことが挙げられる。特に今回は大企業関連の事業所も参画するなど、企業規模に囚われないサードプレイスとなった。この「同志」が生み出すまちの多様なイノベーションが今後も期待される。

Topics

2021年「こーばへ行こう！」

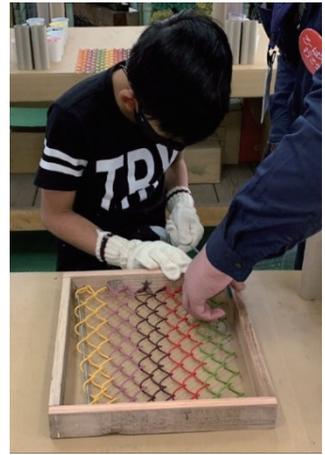
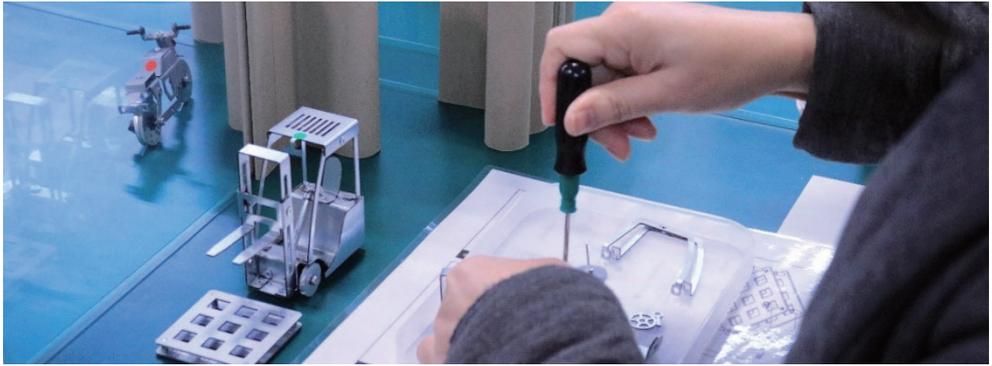
2021年は、11月19日～20日と2日間にわたって「こーばへ行こう！」を開催。従来5社程度で開催していたところ、パワーアップし、一斉に15社の工場がオープンファクトリーを実施し、工場見学ツアーや多種多様なモノづくり体験が開催された。さらに、工場がマルシェやエンターテイメント、スポーツの開催場所にもなり、「めったにみられへん工場」を見せる場ともなった。

Future (今後の展望)

工業×〇〇で、魅力発信！

東大阪市は、「モノづくりの町」「学生の町」「ラグビーの町」と、3つの特色を持っている。工場密度が日本一であり、多種多様な町工場が現在5954社稼働している。2018年、たった1社のみで開催したイベントは、当初から反響を呼び、2019年の開催は、ラグビーワールドカップが東大阪で開催されたことから、東大阪産業フェアのコラボ企画として駅前商店街を舞台に6社で実施。2020・2021年は、工業×商業をテーマに、地域商店を工場に巻き込んで新たなイノベーションの創出を図った。

今後は、「工場×〇〇」をテーマに、工場の繋がりにだけでなく、他業界とボーダーレスな関係性を築き、東大阪の都市の魅力を全国に発信していきたい。



参画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

地域未来牽引企業

株式会社アオキ

大阪ものづくり
優良企業賞「匠」

勝井鋼業株式会社、
サントー試作モデル株式会社、
野田金属工業株式会社

大阪人材確保推進会議
Eカンパニー

野田金属工業株式会社

JIDAデザインミュージアム
セレクション

共和鋼業株式会社(NETBENCH)

2019年グッドデザイン賞

共和鋼業株式会社(NITFENCE)

健康経営優良法人
2022

野田金属工業株式会社



DESIGN
WEEK
TANGO

DESIGN WEEK TANGO

京都府京丹後市、与謝野町

開始年：2021年

開催期間：2021年6月24日～27日/ 4日間

主催：(一社)Design Week Kyoto実行委員会・
株式会社CADENA

参加企業：計21事業者

来訪者数：2,500人

(リアル+オンライン参加者合計)



Basement 取り組みを支える屋台骨



事務局リーダー
北林 佳奈 氏

COS KYOTO株式会社 取締役



デザインチーム
佐藤 恵月 氏

デザインオフィスWA-plus 代表



企画・調整
梅田 優希 氏

株式会社ローカルフラッグ

Trend Setter 北林 功 氏

仕掛け人



一般社団法人Design Week Kyoto実行委員会 代表理事。
COS KYOTO株式会社 代表取締役。

地域のモノづくり産業のグローバル展開サポートや人材育成、文化交流事業や学びのツーリズムを通じて、自律・循環・持続する心豊かな社会構築に挑む。平成28年より、モノづくり現場での交流を通じた創造的地域づくりにも取り組む。

●連絡先

一般社団法人Design Week Kyoto実行委員会 事務局

〒600-8846 京都府京都市下京区朱雀宝蔵町34 Umekouji MARKEet 3階
TEL 075-874-2718

CO-LEADERS

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリーの企画・運営を担う中核的存在

株式会社CADENA

代表取締役 川那辺 保伸 氏 & 取締役 山本 啓史 氏

“Good Groove⇒Innovation”をコンセプトに、あらゆる可能性が生まれ続ける日々ワクワクできる社会を目指して、「組織デザイン」「事業デザイン」「ソーシャルデザイン」に関わる多くのプロジェクトに事業会社や地域とともに取り組んでいる。DESIGN WEEK TANGO2021では、企画設計・プロジェクト運営のほかワークショップデザインを担当。



京都北都信用金庫

京都府北部・中部を営業基盤とする信用金庫。DESIGN WEEK TANGO2021では後援団体として加わり、事業社の募集やワークショップ会場等の提供、職員が運営スタッフとして加わるなど、幅広いサポートによって運営を支えた。



エリアMAP



100年後につなげる丹後のモノづくり

Features (特徴)

あらゆる「距離」を超えて、 丹後のモノづくりの未来を拓く

京丹後エリアと与謝野エリアから21のモノづくり事業者が参加するオープンハウス。「100年後につなげる丹後のモノづくり」をコンセプトに、業種、職種、立場、年齢、国境を超えた多種多様な人が丹後のモノづくり現場を訪れ、交流できるコミュニティを目指す。リアル（現場）とオンラインの双方で、ロケーション、文化や言語の違い、これまでの常識など、あらゆる「距離」を超えて、丹後のモノづくりの未来を拓くため、2021年はテーマを“Beyond the Distance”と設定。

Innovation (効果・創出)

新たな人、企業、機関との出会いによる可能性の拡がり

DESIGN WEEK TANGO2021での取り組みを通じて、参加事業社間のモノづくり現場見学、国内外の企業との交流や引き合い、教育機関からの登壇依頼など、これまでになかった新たな交流が生まれ始めている。

具体的なものとして、通年型で工場を訪問して交流が可能なエリアを工場内に新設する動きや、京都の事業社がオンラインで訪問してから実際にリアルに訪問し、新たなコラボレーションにつながった事例、訪問した人が事業者の取り組みに興味を持ち、継続的に訪問・交流したことで雇用につながったケースなどが挙げられる。その他、“DESIGN WEEK KYOTO”の参加事業者との交流が行われ、オリブの収穫ワークショップに京都から多数訪れて手伝ったり、相互の技術交流・人的交流の土壌が育ち始めている。今後、交流の日常化による更なる効果が期待される。

また、コロナ禍の影響により、開催当日に自社の現場をオンラインで訪問してもらうにあたり、当初はオンラインツールに不慣れな事業社もワークショップやリハーサルを通じて、実施当日には概ね支障なくツールを使いこなし、自社の技術や魅力を訪問者へ効果的に伝えられるように準備をすすめた。距離的ハンディを超えられる環境が整い、これまで接点がなかった方々から感嘆の声を直接聞けることにより、自社の魅力への気づきや自信へとつながった。

開催一年目として様々な経験値を積み重ねたことから、周囲からは次年度以降さらなる発展に期待が寄せられている。

Topics

準備期間で見つめ直した自社の原点、強み等

開催に向けて、2021年4月頃から参加事業社向けにワークショップを計4回実施。各社が自社の原点となる成り立ちやモノづくり技術の特長等を見つめ直し、それらをオープンハウス来場者へ効果的に伝えるための説明やストーリーを立てる準備を進めた。その活動を通じて、自社の原点に繋がる史料の発見、自社の強みや進むべき方向性の再確認などの機会となった。業種が異なる21社それぞれが自社のストーリーを発信する場があることで、「同じエリアでお互いに存在を知っていても交流があまりなかったこと」に改めて気づき、オープンに互いに訪問し合うことで、地域全体の魅力を見出す機会に繋がっている。

Future (今後の展望)

新たな可能性を切り開くきっかけを目指して

参加事業社同士が日々交流を深め、丹後の素晴らしさとポテンシャルに確信をもつこと、それらを国内外の多くの人たちに発信し、地域の新たな可能性を切り開く丹後の現役世代の関係づくりを目指す。そして、輝いている現役世代に次世代が憧れ、自分たちも丹後のモノづくり、丹後の素晴らしさを受け継いでいきたいと自然と思ってくれるような地域を実現する。そのためにも、年間を通じた交流の場としていくこと、運営を地域の方々が担えるように取り組んでいく。



地域一体型 オープンファクトリー企画の経緯

丹後地域でオープンハウスを開催する構想は5年ほど前からあった。仕掛け人である北林氏は丹後の織物産地の活性化等の仕事で丹後を訪問する中で、そのモノづくりや自然の奥深さに感動を覚えていた。そのため展示会などに出展するだけでなく、丹後の素晴らしさを直接感じに来てもらえる場の必要性を感じていた。そして、丹後の様々なプレイヤーの方々と地域の未来を考える話し合いの場があり、北林氏もファシリテーターとして参加していた。その中で参加者が口々に丹後に足を運んでもらいたい、素晴らしさを感じて欲しい、ということをも異口同音に熱く語っていた。そこで北林氏も「命がけでやりますので、皆さんも命がけでやりましょう！」と話し、そこから少しずつ機運を盛り上げていき、さらにコロナ禍となってオンラインツールが一般に普及したことを機会と捉えて、オンラインと併用しての実施に繋がった。



参画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

地域未来牽引企業

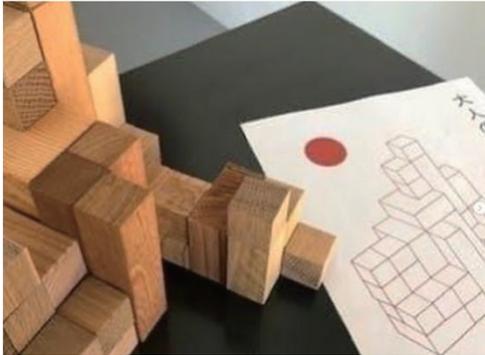
株式会社シオノ鋳工

はばたく中小企業
小規模事業者300社

株式会社ワタマサ









FactorISM

大阪府八尾市、東大阪市、堺市、門真市

開始年：2020年

開催期間：2021年10月21日～10月24日/ 4日間

主催：まちのこうほうぶ（FactorISM 実行委員会）

参加企業：約43社

来訪者数：2万人以上

（リアル+オンライン参加者合計）



Basement 取り組みを支える屋台骨



事務局長

山田 紘也 氏

株式会社ビーダッシュ
代表取締役社長



WEBディレクター

野村 範仁 氏

株式会社ジョイントメディア
企画・ディレクター/営業



広報担当

寺田 昌樹 氏

株式会社電通関西支社
プロデューサー

Trend Setter 松尾 泰貴 氏

仕掛け人



株式会社友安製作所 ソーシャルデザイン部担当 執行役員
FactorISM 統括プロデューサー

元八尾市職員。「みせるばやお」の立ち上げに尽力。ものづくりのまちである八尾を広く知ってもらおうと、子どもたちにもものづくりの楽しさを伝えるワークショップや、企業間の交流を促進するためのイベントなどを実施している。地方公務員アワード2019を受賞。

●連絡先

FactorISM 実行委員会
〒581-0803 大阪府八尾市光町2-60 リノアス8F
TEL:072-920-7128 (株式会社みせるばやお)
E-mail: machi@miseruba-yao.jp

CO-LEADERS

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリーの企画・運営を担う中核的存在

FactorISM実行委員会事務局 (まちのこうほうぶ)

所属も業種も異なるメンバーが、「まちこうばをエンターテインメントに変える！」を合言葉に、普段、私たちの生活を支え、暮らしを豊かにしてくれている日本のものづくりの素晴らしさ、面白さをもっとたくさんの人たちに知ってもらい、後世にバトンを継いでいきたいとの想いを一つに活動している。



実行委員長
太田 泰造 氏
錦城護謨株式会社



副実行委員長
友安 啓則 氏
株式会社友安製作所



堺支部長
福田 康一 氏
株式会社河辺商会



門真支部長
一瀬 勇樹 氏
株式会社一瀬製作所



八尾支部長
梶原 弘隆 氏
株式会社オーツー

エリアMAP



こうばはまちのエンターテイメント

Features (特徴)

地域のストーリーをつむぐコミュニティ活動

「FactorISM(ファクトリズム)」は、大阪府八尾市を中心とした、町工場でのものづくりの現場を体験・体感してもらいイベントである。FactorISM(ファクトリズム)は、Factory=こうば、ISM=主義・主張、Tourism=観光を組み合わせた造語である。

会期中は一般の方向けの工場見学やワークショップを開催し、「職人が何を考え、何を感じてものづくりに励むのかを知り、そこに憧れをもつ。」ことを目指す。

合言葉である「こうばはまちのエンターテイメント」には、そんな想いが込められている。

Innovation (効果・創出)

業種を超えた様々な企業との出会い、新たなコラボレーションへの「刺激」

FactorISMは、こうばやそこで働くつくり手、それぞれの想いを伝えることで、ものづくりという地域のアイデンティティを次代に受け継ぎ、持続可能なまちづくりや、ものづくりを新たなエンターテインメントとする「モノヅクリテイメント構想」の実現を目指す。

FactorISMは単なるイベントではなく、コミュニティである。FactorISMを通じて、地域、大学、大企業、メディアと中小企業との「意味のイノベーション」を小さく生み出し、大きく育てることを目指している。

参加した企業からも、「普段他の企業の方と知り合う機会がなく、FactorISMを通じて、知り合った他社のオープンファクトリーも見学できた」、「スタッフが試行錯誤して取り組んだこともあり、成長につながった」といった声や、「イベントをきっかけに、他のおもしろい企業を知るきっかけとなった。コラボ企画にも挑戦したい」と開催回数を重ねるごとにモチベーションを高めている。

また、参加企業同士においての交流から繋がるイノベーションに止まらず、外部交流のきっかけにも繋がっており、「こうばのでんしゃFactorISM in 近鉄電車」、「展覧会 in 大阪府立中之島図書館」の実現にも繋がっている。

また、2022年3月には、遠隔地の製造現場や工場をVR見学できる“ワープ型オープンファクトリー”にも取り組んでおり、常に進化を続ける同取組の今後の発展から目が離せない。

Topics

2021年のテーマは「刺激」

新型コロナウイルス感染症の影響で、厳しい社会情勢の中、「モノタメを止めるな!」という声明のもと、2020年に開催したFactorISMは、オンラインとリアルを融合したハイブリッド開催を実現。まさにニューノーマルの時代への挑戦であった。2021年は、Withコロナの時代において、地域を超えた新たな出会い、ものづくり企業同士の結束、コラボレーションなど新たな繋がりによる「刺激」をテーマに、さらなる挑戦を続けた。2022年のテーマは「触発」。刺激から触発を受け、新たな躍動に繋げる。

Future (今後の展望)

2025大阪関西万博を見据えて

2025大阪・関西万博を見据え、今後も継続してFactorISMを開催することで、イベントの認知度を高め、参加したいと考える企業やイベント来場者を増やしていく。

世界に向けては、「こうばはまちのエンターテイメント」というムーブメントを広げていくと同時に、中小企業のものづくり技術・技能を地域ブランドとして確立させ、海外に発信していく。これらを通じて、こうばで働く人、それらこうばがある地域の人々、それぞれが誇りをもって、こうば・まちで活躍し、持続可能な社会・経済システムづくりへの貢献に繋げていきたい。



地域一体型 オープンファクトリー企画の経緯

開催エリアとなっている八尾市には「みせるばやお」、門真市には「もりかど産業支援機関ネットワーク」、堺市には「さかいセカンドスタートアップ」というそれぞれの事業を通して市役所産業担当者と地域企業群との関係性が構築されており、当該市役所担当者達が繋ぎ手となって、企画が始まったのがFactorISM。

※なお、当該担当者達は近畿経済産業局への出向経験を通しての繋がりを有していた。

そして、お互いの地域で躍動する企業の可視化とエリアを越えた交流を実現するため「オープンファクトリー」という切り口で支援方法を考え、役所の垣根を超えた広域の実行委員会が立ち上がり、現在の礎となっている。



参画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

地域未来牽引企業

アベル株式会社、株式会社オーツー、柏原計器工業株式会社、木村石鹼工業株式会社、錦城護謨株式会社、株式会社小泉製作所、大日運輸株式会社、株式会社友安製作所

はばたく中小企業 小規模事業者300社

葵スプリング株式会社、大阪糖菓株式会社、株式会社オーツー、柏原計器工業株式会社、大日運輸株式会社、谷元フスマ工飾株式会社、智頭電機株式会社、株式会社友安製作所、株式会社ナカニ、藤田金属株式会社、有限会社森田製針所、株式会社ロボテックス、株式会社和田島

ものづくり日本大賞

アベル株式会社(経済産業大臣賞)





貝塚 泉佐野

貝塚オープンファクトリー

大阪府貝塚市、泉佐野市

開始年：2021年

開催期間：2021年11月4日～11月6日/ 3日間

主催：貝塚オープンファクトリー実行委員会

参加企業：約15社

来訪者数：250人以上



Basement 取り組みを支える屋台骨



事務局運営

西村 一郎 氏

ライジング株式会社
Webソリューション事業部



受付運営

前田 浩一 氏

(一社) 貝塚寺内町保存活用事業団
業務執行理事



会場レイアウト・設営

守行 忠勝 氏

株式会社ポートフォリオ
取締役 一級建築士

Trend Setter 延生 康二 氏

仕掛け人



貝塚オープンファクトリー実行委員会 実行委員長。
大阪府貝塚市出身。2017年に建設会社「延生建設株式会社」の代表取締役社長に就任。2020年コワーキングスペース運営企業として、株式会社ポートフォリオを設立。2021年7月、地元貝塚駅前の南海電鉄が所有する建物をリノベーション、カフェを併設したコワーキングスペース「ポートフォリオ」をオープンさせる。

●連絡先

貝塚オープンファクトリー実行委員会

〒597-0083 大阪府貝塚市海塚1-1-23 ポートフォリオ内

E-mail : info@kaizuka-of.com

CO-LEADERS

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリーの企画・運営を担う中核的存在

貝塚オープンファクトリー 実行委員会

貝塚市、泉佐野市を拠点とする異業種メンバーで構成される。普段公開されていない、地域に根差した中小企業の製造現場を見学・体感できるイベント開催に向けて取り組む。以下は特に中心となって活動してきた4名。



寺下 光洋 氏

株式会社テラシタ
代表取締役



中野 壮人 氏

中野産業株式会社
取締役



木岡 幸子 氏

日本紙工株式会社
営業部 企画開発室 主査



岡野 聡 氏

延生金属株式会社
工場長

南海電気鉄道株式会社による取組へのサポート

南海電鉄では#BIZ TAG NANKAI（沿線企業魅力共創プロジェクト）の一貫として、自社HP内での貝塚オープンファクトリーの取組紹介やイベントレポートの掲載、南海電車内広告の掲載を行うなど、オープンファクトリーイベントを応援している。南海電鉄が事務所・倉庫として長年使用していた貝塚駅前の施設がリノベーションされ、「ポートフォリオ」という拠点名で地元企業である株式会社ポートフォリオが運営。「ポートフォリオ」は、貝塚オープンファクトリーの集合会場・メイン会場としても活用された。



泉州地域産業の魅力を まるごと体感する

Features (特徴)

体験を通して知る泉州に根付く多様な産業

開催エリアとなる貝塚市・泉佐野市には、泉州タオル・ワイヤロープ・泉州水なすなど、高い技術力で魅力的な商品を生み出す多様な製造事業者や農家が存在する。

普段はあまり馴染みのない地域の製造工場や、地域に当たり前に流通する農産物が作られる農園を敢えて一般公開し、日常生活や地域産業を支える製品・人・技術に直接触れられる体験をオープンファクトリーイベントとして開催。地元の農産物の収穫体験や寺内町歴史案内ツアーも開催することで、泉州に根付く多様な産業を地域内外の方々に発信する。

Topics

コロナ禍による延期にも負けない地域への想い

2020年冬頃から延生氏を中心として立ち上がった構想で、当初2021年の夏開催の予定で準備を進めていたが、コロナ禍の影響により直前で延期を決意。2021年10月頃に、11月の開催を決定し初開催となった。延期の間も「参加企業さんが結束し、新たな仲間を増やすチャンス」と捉え、前向きに躍動しつづけた本取組。「地域への想い」が熟成し、「地域への想い」が初回開催を成功裏に導いた。また、開催初年度から多くのメディアに注目され、全国放送でも紹介されている。

Future (今後の展望)

“貝塚”から他地域へ広がる”見える地域産業”

初回のオープンファクトリーイベントにおいても泉佐野市の企業が参画するなど、元々旧和泉国という土地柄もあり近隣地域産業は市域を越えて繋がりが深い。今後は泉佐野市はもちろん、岸和田市等、近隣の市町においても”根付き””伝えるべき”産業を支える協力事業者を増やしていき、「泉州地域産業の魅力をまるごと体感する」イベントとして、一層の進化を目指す。

Innovation (効果・創出)

業種を超えた企業間の 新たなコラボレーション

貝塚オープンファクトリーを開催して、地域内外の様々な参加者に泉州地域産業の魅力を味わってもらい、見られることで参加企業の工場内が綺麗になったり、働く現場の社員さんたちが「説明するために改めて会社のことを調べ直す」など、人材育成を筆頭とした様々なインナーブランディング効果が生まれている。こうしたことも有意義なイノベーションである一方、開催に向けて参加企業同士が協働したことをきっかけに、互いを知り、本業面での協業に繋がったケースも生まれた。

具体的にはBtoB事業者が新事業としてこだわりの詰まったアウトドア新商品を生み出したものの、量産品ではないことから梱包用紙箱の企画をお願い出来るところが少なく困っていた。しかしこのオープンファクトリーの取組をきっかけに小ロットでの紙箱企画製造が可能な企業がメンバー内であることを知り、商品化において付加価値を迅速かつ大きく高めることに繋がった。

こうした事例をはじめ、貝塚駅前のコワーキング施設「ポートフォリオ」にて開催する、異業種交流会イベントに、貝塚オープンファクトリーに関わったメンバーを中心に、積極的に参加する企業が増えた。異業種同士の交流が促進され、まさに回を重ねるごとに、未来志向に向けた集まりとなっている。

これらがきっかけとなり、企業同士のコラボレーション実現に向けても水面下で具体化しつつあるなど様々なイノベーション、またはイノベーションに繋がる動きが生まれている。



地域一体型 オープンファクトリー企画の経緯

貝塚市・泉佐野市には、泉州タロー・ワイヤロープ・泉州水なすなど、高い技術力で魅力的な商品を生み出す多様な製造事業者や農家が存在する一方、多くの事業者が後継者・働き手不足による廃業や事業縮小等の課題を抱えている。

普段は目にする機会のない製造・生産現場を一般公開することで、地域や異業種企業とのコミュニケーションを図り、地域での認知拡大、インナーブランディング、商品・技術の潜在価値の発見に繋がりたいという想いからスタートした。

参画企業の一社でもある延生金属株式会社に外部デザイナーが訪れ、「産業用帯鉄」を「これまでになかったこい建材」と捉え、某ホテルの照明パネルへの採用というインテリア業界に新たな販売チャネルを獲得した実体験が、上記の想いを大きく支えており、「予定調和のない出会い」の重要性を地域内に浸透させるべく、多くの地域内企業を巻き込み活動を広げている。



参画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

大阪ものづくり優良企業賞

延生金属株式会社

健康経営優良法人

日本紙工株式会社

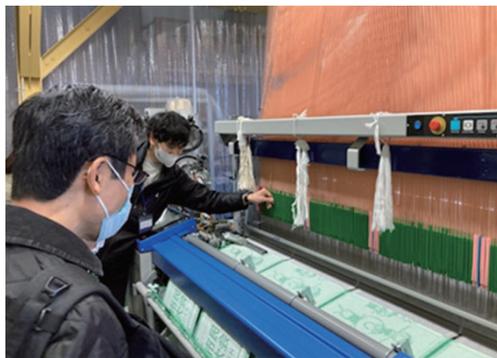
ジャパコオリティ企業認定「安全・安心コンプライアンス（編立）（染色加工）（企画・販売）」

中野産業株式会社

全国農業コンクール全国大会
名誉賞・農林水産大臣賞受賞

中出農園









CRAFT VILLAGE

兵庫県丹波篠山市

開始年：2021年

開催期間：10~11月

主催：丹波篠山クラフトヴィレッジ製作委員会

参加企業：31社

来訪者数：約1,000人



Basement 取り組みを支える屋台骨



一般社団法人 TSUMUGI
代表理事
林 健二 氏



地元大好き
丹波篠山っ子
仙林 寛実 氏

Trend Setter 加古 勝己 氏

仕掛け人



京都市出身の丹波陶磁の陶芸家。京都・西脇・丹波篠山と活躍の場を移しながら数々の作品を生み出す一方、山の楽しさなど地域の魅力発信に尽力するキーパーソン。移住者が増えるまちで、ゆるやかなネットワークを求める声を「CRAFT VLLAGE」という形で実現した。

●連絡先
丹波篠山クラフトヴィレッジ製作委員会
E-mail : tscvill@gmail.com

CO-LEADERS

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリー企画・運営を担う中核的存在

SANROKU

中西 一矢 氏

王地山陶器所

竹内 保史 氏

通訳案内士

田川 剛 氏

地元大好き丹波篠山っ子

仙林 寛実 氏

丹波篠山市 観光交流課

小山 達朗 氏

小林 真弓 氏



ユネスコ創造都市ネットワーク

丹波篠山市はクラフト&フォークアート分野で、平成27年12月11日にユネスコ創造都市ネットワークに加盟が決定。同市には、美しい町並みや景観、伝統文化、自然環境などさまざまな魅力がある。都市部である京阪神から約1時間の距離にありながら、都市化に走らず、農村文化や伝統産業を守り続けきた。これから丹波篠山市は、農村風景や地域コミュニティ、日常の生活文化がもっている「創造性」に光をあて、農林業・工芸・建築・祭礼などの先人たちの技術に、新しい知恵を重ねて受け継がれてきたことを「創造産業」として、さらに発展させていく。このCRAFT VILLAGEもその一環。

工芸を身近に感じる5日間 広がれクラフトの輪

Features (特徴)

生まれ始めた「新しい産地」

市内には850年の歴史を誇り、60の窯元がしのぎをけずる丹波焼の他、木工、ガラス、革、陶芸など数多くの工芸家が活躍している。他の地域のオープンファクトリーは「産地」の活性化を目的としていることに対して、丹波篠山には移住する工芸家も多く、「新しい産地」が生まれ始めていることが特徴。

親切でおおらかな地域の方々の性格も移住者の増加に寄与している。

Topics

「丹波焼の里 春ものがたり」と 「まちなみアートフェスティバル」

10年以上前から続くイベント「丹波焼の里 春ものがたり」。丹波焼は日本六古窯で日本遺産の認定を受けている歴史ある焼き物であり、当イベントでも工房や最古の登り窯を見学するなど歴史と現場にふれ合うものとなっている。

また美しい町なみの河原町を中心にくり広げられる、「まちなみアートフェスティバル」など、まちを挙げての取り組みが盛んに行われている地域である。

Future (今後の展望)

「次はこうしたい！」を体現

初回開催となった2021年は約1,000名の来訪があり、盛会となった。「来年にはワークショップを考えたい」など、新しいアイデアに夢を膨らませている。

そうした中で、次回2022年の開催は春・秋の二回開催を目指し、将来的には通年型観光の取組へと発展させていくべく、ムーブメントを加速させていく。

「移住者が多い町＝多様な能力を持った人材の宝庫」CRAFT VILLAGEの今後の成長の多様性が楽しみである。

Innovation (効果・創出)

試行的ガイドツアーから見いだす 将来性と連鎖する拡張性

今回のCRAFT VILLAGEに併せて、様々な関係者をアテンドするツアーを、実行委員であり通訳案内士の田川氏の案内で開催した。

有識者、議会関係者、その他、外国人留学生など様々な視点からツアーを実施したところ、参加した方々にリアルを体感いただき、CRAFT VILLAGEを応援する意義を共有出来た。

またこの共有は訪れた事業者の方のお話から得られる刺激ももちろんであるが、参加者同士が移動途中の行程で「ここが良かった」「ここはこう思った」など意見を交わす時間があり、その互いの発見同士を共有することでより理解が深まることとなった。これらは、本気でCRAFT VILLAGEを楽しむ「ファン」が増える効果に繋がったと考えられる。

さらに、今回の取組に当たって市民の方々に大きな刺激を与えたことも印象的。自分たちが住む町への新しい気づきが生まれるなどシビックプライドが形成される効果を生み出した。

工芸家同士の交流にもつながり、創作意欲をかき立てるものともなっている。「互いを知るため」と小さく始まった取組は、まだまだ大きく進化する。



地域一体型 オープンファクトリー企画の経緯

取組の舞台となる丹波篠山市は丹波焼に代表される工芸や建築、農林業、祭礼など地域固有の文化や生活文化が持っている「創造性」に光を当てたまちづくりが評価されユネスコ創造都市ネットワーク加盟にも繋がった。加えて京阪神からの利便性や自然豊かな生活環境もあり、近年移住して工房を構える方々が目立つようになったが、移住工芸者同士の交流、訪れる観光客との交わりだけでなく、市民さんとの交流の必要性が高まってきたことから、「作り手」と「使い手」の思いが伝わるイベントとして2021年秋に「丹波篠山クラフトヴィレッジ」が開催されることとなった。

こうした地域における課題感 Trend Setterである加古氏とSANROKU中西氏、市役所職員である小山氏との間で共有されていたが、実行に移るに当たってはBasement人材である林 健二氏がアクセルとなり、仙林 寛実氏が地域内でのバランスーとして躍動したことが大きな原動力になっている。



王地山クラフトマーケット

クラフトビレッジの際に開催された丹波篠山の作家によるクラフトマーケット。陶芸・ガラス・革・染織など、こだわりの作品が秋の王地山に並んだ。参加工房数：16工房







開始年：2021年

開催期間：2021年6月12日/ 1日間

主催：(一社) サスティナブルジェネレーション

参加企業：21社

来訪者数：40人



Basement 取り組みを支える屋台骨



ディレクター
村松 葉子 氏

有限会社ゲイル 代表取締役



オープンファクトリー発案者
秋本 大輔 氏

株式会社新田 工場長



企画・運営
中崎 宏平 氏



水上 和之 氏
SG NARA事務局

Trend Setter

勝谷 仁彦 氏

仕掛け人



SG NARA 代表発起人

東京都出身、奈良県育ち。大学卒業後、会計事務所にて10年間のコンサルタント業務に従事した後、2010年、家業、株式会社アクラムを継承。2012年代表取締役役に就任。ファクトリーチームウェアブランド「スクアドラ」を立ち上げ、チームのチカラを發揮させる社会の実現を目指しながら全国展開する。

●連絡先

SG NARA 事務局

E-mail : info@sg-nara.org

CO-LEADERs

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリーの企画・運営を担う中核的存在

SG NARA 発起人

『SG NARA』は、Sustainable Generation (持続可能な世代交代) で成長を図ることを究極の目的に、奈良で生きる経営者そして経営者でない人も含め「変わりたい」「何とかしたい」という「思い」「意思」を持つ全ての人のつながりの場を作っていくプロジェクト。



発起人

吉田 佳代 氏

梅乃宿酒造株式会社
代表取締役社長



発起人

南島 忠男 氏

株式会社ミナシマ自動車販売
代表取締役社長



発起人

高木 美香 氏

株式会社高木包装
代表取締役社長



発起人

谷 英希 氏

株式会社ヴァレイ
代表取締役社長

エリアMAP



出典：奈良県ホームページ
<https://www.pref.nara.jp/3605.htm>

年齢も立場も関係なく、垣根を越えて ものづくりの新たな価値を創造する アトツギ達の大フェスティバル

Features (特徴)

地域に関わる人たちとつくりあげる、 進化形オープンファクトリー

奈良県内の幾多の場所で数多の人々の魂が込められて、ひとつの製品が生み出されている。奈良のそんなものづくりを、つくり手自らが伝える場が、奈良初のオープンファクトリー「SG (サスティナブル・ジェネレーション) ストリートNARA」である。その特徴は、単なる「工場見学」ではなく、つくり手たちの“経験”と“誇り”が詰まった魂の声を、奈良県の学生たちが若さならではの好奇心で映像化する点である。それを地域住民を含むステークホルダー、社員とその家族たち、異業種のつくり手たちと共有していく、進化形オープンファクトリーである。

Topics

コロナ禍でも、臨機応変な開催形態の工夫

当初は、2日間のリアル開催を予定していたが、コロナ禍により、1日での開催に変更。またリアル開催は断念する形となった。2021年6月12日に、キックオフイベントをオンラインにて開催。広陵町・高田町エリアのものづくり企業4社による事例発表やトークセッションを展開。熱のこもったトークセッションの議論はオンライン視聴者にも熱く伝わっている。

今後、コロナ禍で延期となってしまっていた、奈良女子大学などの県内学生による「動画撮影隊」がファクトリーツアー参加企業を回る「ファクトリー紹介動画」の配信も検討している。

Future (今後の展望)

強みを編み込むことで生まれるイノベーション

参画企業の多い大和高田市や広陵町には「靴下」の製造ブランド企業が多く所在し、近年その知名度は全国に広がっている。また近隣の大企業やスポーツチームとの交流を持つ機関・企業など、それぞれが保有する技術・チャンネルの強みを掛け合わせ、訪れる人々の数だけに注目するのではなく、参画企業同士を繋げ、編み込むことで生まれるイノベーション創出を期待し、2022年度のリアル開催に向けて準備を進めている。

Innovation (効果・創出)

業種を超えた、企業が繋がり、 新しい価値観に出会える場

SGストリートNARAの活動のベースは、SG NARA のコアな取組である「ツキイチSG」である。「ツキイチSG」は月1回、SG NARA発起人企業が用意する場であり、発起人と参加者15~30人程度で実施する小規模対話会である。2020年度は、全9回のツキイチSGを開催、2021年度も7月から開催し、継続している。

SG NARAには製造業・金融業・サービス業等様々な業種が集まり、ひとりでは思いつかないことや新しい価値観に出会えるきっかけの場になっている。バックグラウンドも業種も異なる色々な人が、色々な角度から自分の考え方や想いに対して、意見を述べてくれる。時には悩み事も自由に話し合える場である。

例えばコロナ第一波時に、メンバーが受託した医療用ガウン10万枚の生産を、縫製業界関連メンバー4社が協力して納品した事例がある。

また、金融機関勤務のメンバーが、家族の起業にあたってツキイチSGで相談したところ、何人ものメンバーから、マーケティングや資産調達等の実務のアドバイスや、起業の考え方、心の持ち方まで、様々な角度からの親身な助言を受け、新たなスタートをきることができた事例などがある。

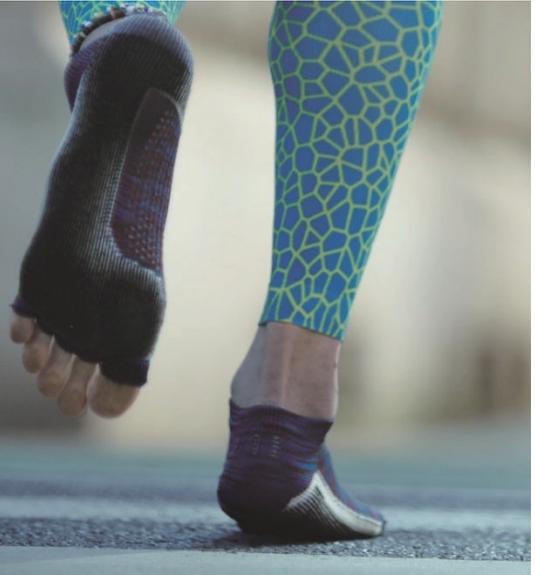
現在、取材やメディアでの発信によりSG NARAへの注目が高まってきており、政府機関や放送局・外部団体や企業からコラボレーション（共同取組）の要請が増えてきている。今後、どのように連携していけるか、ツキイチSGを中心に検討中である。



Whether you are doing some exercises, or going about your everyday activities, OLENO both adds a touch that will make you feel fashionable AND provides functional help for your activities – so you can enjoy them even more.

OLENO is a “LIFESTYLE” brand produced by a long-established knitting manufacturer.

MADE IN JAPAN



地域一体型 オープンファクトリー企画の経緯

ツキイチSGの参加者が、コロナ禍でも地元の結びつきを広げるマルシェを実施したことについて情報共有があったことがきっかけである。そして互いの経験を共有する価値は、企業人だけでなく、地域にも知ってもらいたいとの考えから、他地域でも潮流が生まれつつあった“オープンファクトリー”についての提案が生まれ、具体的な実施に向けて検討がスタート。取引先に対する工場見学ではなく、これまで関わりがなかった業界・市場、そして消費者との接点を持つことで地域に新たな刺激をもたらすことを期待し、市町村はもちろん、地域金融機関ともタッグを組んで進められた。

開催のタイミングは当初2021年3月を予定していたが、緊急事態宣言発出に伴い延期となり、6月開催となるなど初回から多くの苦労も経験したが、生まれた時間で地域近隣大学との連携を進めるなど、進化に繋げる対応力はSG NARAが培った交流力の賜物と言える。



参画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

地域未来牽引企業

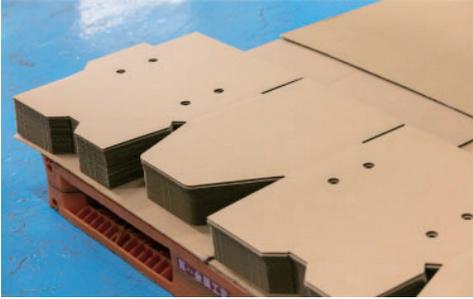
梅乃宿酒造株式会社、株式会社M.T.C.、葛城工業株式会社、昌和莫大小株式会社、株式会社タナベ、大和化学工業株式会社、西垣靴下株式会社、ヤマヤ株式会社、ライクイット株式会社（株式会社吉川国工業所）

はばたく中小企業 小規模事業者300社

株式会社ヴァレイ、
ライクイット株式会社（株式会社吉川国工業所）

関西ものづくり新撰

昌和莫大小株式会社







黒江るるる

和歌山県海南市

開始年：2020年

開催期間：11月頃

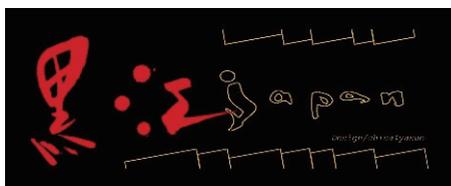
主催：黒江あるく・みる・つくる実行委員会

参加企業：15社

来訪者数：約116人



Basement 取り組みを支える屋台骨



黒江Japan

黒江の町並みを活かした景観づくり協定(通称「黒江Japan」)は、2011年に和歌山県景観条例知事認定第1号として認定された。紀州漆器で栄えた黒江の町並みを守り、育て、次世代に引き継いでいくことを目的に、空家の有効活用・町並み保全・地元住民を巻き込んだ様々なイベント開催など、地域に根付いた活動をしている。

Trend Setter

仕掛け人



山家 優一 氏

第二回黒江るるる代表。山家漆器店 営業 / 株式会社やまが 代表取締役

日本四大漆器の1つである紀州漆器を中心に工芸品を取り扱う山家漆器店の三代目。紀州漆器の新たな可能性を模索するインテリア製品ブランド「KISHU+」の運営にも参加しており、「海外に紀州漆器の販路を拓こう」を合い言葉に地域のリブランディングに取り組んでいる。

●連絡先

山家漆器店

〒642-0012 和歌山県海南市岡田223

E-mail : yamagakinan@gmail.com

CO-LEADERs

※仕掛け人と一緒にオープンファクトリーの企画・運営を担う中核的存在

発起人 池原 弘貴 氏

池庄漆器店 五代目店主

創業明治9年の漆器問屋で店舗は築220年の国の登録有形文化財に指定されている。7年間町づくり団体「黒江の町並みを活かした景観づくり協定(通称:黒江Japan)」で代表を務め、地元住民とサポーターを巻き込みながら古民家や景観を活かした様々なイベント企画や活性化に尽力。



黒江ぬりもの館 代表 瀬戸山 江理 氏

まちづくり会社 株式会社楽善舎 代表
古民家カフェ黒江ぬりもの館店主

和歌山市から海南市黒江に移住
海南市地域おこし協力隊(2018年10月-2021年9月)広報担当
仲間たちとともに『黒江』の魅力を発信すべく『黒江めった祭り』『こみちあるき』等の地域イベントを手がける。地域にある有休不動産を活用したコミュニティスペース『黒江tetotte〜旧岩崎邸』を創造中。



アクセス



【電車を利用する場合】

新大阪駅から約1時間10分。

(JRの「特急くろしお」)

※市の主要駅である「海南駅」にはすべての特急電車が停車。

その他、市内には北より「黒江駅」、「冷水浦駅」、「加茂郷駅」、「下津駅」と計5つのJRの駅が所在する。

【自動車を利用する場合】

阪和自動車道で大阪市内から約1時間。

市内のインターチェンジは、「海南東インターチェンジ」、「海南インターチェンジ」、「下津インターチェンジ」

引用：海南市役所ホームページ

あるく・みる・つくる ものづくりの楽しさを体感！

Features (特徴)

多様な「漆器」の選択肢を伝える場

「輪島」「会津」と並んで日本三大漆器とよばれる「紀州漆器」の里、黒江。一般的な漆器では下地にも漆を用いるが、紀州漆器は下地は主に柿渋や膠（にかわ）を用いてシンプルかつ丈夫に仕上げられる。また、江戸時代の中期ごろに分業制が敷かれ、大量生産できる体勢が整えられたことから、庶民の「実用の器」として、手頃な価格に抑えることが可能となり、「日本一のお盆の産地」として名を馳せる。現在では参画企業にもブランド力を持つ企業が台頭し、リーズナブルなものから、歴史に裏打ちされたハイエンド製品まで、一度に様々な漆器に出会える場となっている。

Innovation (効果・創出)

思いを持って繋がったからこそ 越える業種

漆器産業と同様に和歌山の重要な伝統産業「棕櫚たわし」、隣町紀美野町で活躍する手漉き和紙、木製国産タンブリンのトップシェア企業、木製打楽器カホンなど、「漆器」に限らない新しい繋がりが出来たことが、この黒江るるるを実施したことによる大きな効果であり、企業同士、住民が企業について知ることが出来たというローカルインナーブランディングに大きく寄与したことが地域にとっては大きなイノベーションであった。

実際、企画メンバーが知らなかった事業者等もあり、黒江の町の魅力再発見に、大いに期待ができる取り組みであると自負している。また日頃自分たちが日常のように行っているものづくりについても、お客様に喜んでいただける大きなコンテンツの一つであると感じるきっかけとなり、「こんなもので喜んでくれるのか？」といった疑念から、自分たちの技をもっと知って欲しいという意欲につながった。

Topics

連鎖するクラウドファンディング

「黒江るるる」の実施に当たって「クラウドファンディング」を活用したことで、手法として地域に学びを与え、その後、まちづくりの観点から古民家改装カフェを作るためにクラウドファンディングに取り組むメンバーが生まれたり、本業であっても「とりあえずやってみる！」精神が徐々に根付き始めている。

Future (今後の展望)

黒江だけでなく、繋がりを活かした進化を

「黒江るるる」としても徐々に認知を高めてきた中で、新たな連携可能性として漆器産業以外の近隣企業との繋がりが生まれ始めている。

また、県内を走る鉄道会社が「地域一体型オープンファクトリー」を積極的に応援してくれていることもあり、2022年度は黒江の町だけでなく、和歌山市内の企業や取組との連携を活かした形でさらに発展した「黒江るるる」の実現に向けて準備を進めている。

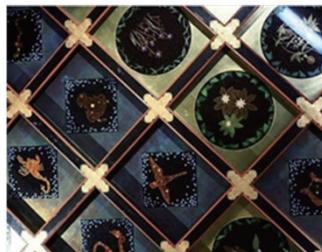
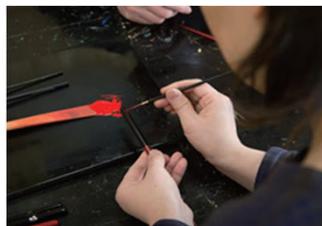
業種を超えて、互いに「あるく・みる・つくる」を共有することで刺激と触発を連鎖させ、イノベティブな地域へと着実に進化を遂げている。



地域一体型 オープンファクトリー企画の経緯

これまで31年間続けられてきた黒江地区で開催される大型イベント「紀州漆まつり」が新型コロナウイルス禍により中止に。これは漆器業者だけでなく、周辺飲食店においても深刻なダメージを経済・精神面共に与えることとなった。そのため、漆器業界やまちづくりに関わるメンバーが「出来ること」を考えた、「黒江あるく・みる・つくるプロジェクト」を企画。参加者を限定する予約型ワークショップの形とすることで、感染リスクを抑えながらも、黒江の魅力を知ってもらう取組として企画されたのがこの「黒江るるる」。

資金もクラウドファンディングで集め、目標金額を達成。翌年の2021年も漆まつりは中止されたものの、「黒江るるる」は開催。徐々に地域での認知だけでなく、和歌山県北での躍動に繋がっている。



企画企業における各種支援機関表彰受賞企業例

和歌山県100年企業

株式会社島安汎工芸製作所

ふるさと名品オブ・ザ・イヤー

高田耕三造商店（株式会社コーゾー）







KANSAI OPEN FACTORY

その他 取組紹介



FAct Eat kadoma

大阪府門真市

開始年：2021年

開催期間：2021年12月10日～12日

主催：門真市駅周辺エリア

リノベーション社会実験実行委員会

出店企業：18社

協力企業：11社

飲食店：14店

来訪者数：約4,200人

Fact（ものづくり）・Act（役者・アクション）・Eat（食）が交わる新しいまちづくりのスタートポイント



REAL : : : : :
BANSUORI

リアル播州織

兵庫県西脇市・多可町

開始年：2020年

開催期間：12月頃

主催：西脇・多可「播州織」連携会議

参加企業：20社

視聴者数：15万人以上(2020年)

播州織230年の「現場の今」が
リアルに見れる、会える



KAIMAKU
GLOVE TOWN MIYAKE PROJECT

KAIMAKU

奈良県磯城郡三宅町

開始年：2021年

開催期間：8月頃

主催：野球グローブ生産

100周年記念事業実行委員会

参加企業：5社

来訪者数：-

三宅町の新たな試合がここから開幕



KNOWLEDGE SHARE

各地の地域一体型オープンファクトリー の取組の分析

京都橋大学 経営学部 経営学科 准教授 丸山 一芳氏を座長に地域一体型オープンファクトリーの実施主体及びキープレイヤーを集めた研究会、エリアを越えた事例の共有に向けて開催したフォーラムイベント、関西以外のエリアの事例についてヒアリングを行い、各地の地域一体型オープンファクトリーでの優良アクション（グッドプラクティス）について検討を行った。



優良アクション分析のフレームワーク

各地の地域一体型オープンファクトリーの優良アクション分析の視点として、ビジネスモデル分析の枠組み（※）を応用し、その要素を、Resource(活動を支える資源)、Activity(活動＝優良アクション)、Value (価値・効果)に分けた。

(※) 出典：井上達彦『模倣の経営学』（日経BP社、2017年）



各地の地域一体型オープンファクトリーと 行政が取り組む優良アクション一例

- 「後援」や、実行委員会へのオブザーバ参加、市長等が名誉実行委員長と名を連ねるなど、地域企業群が集まって組成される非営利の「実行委員会方式」を採用することで様々な形で後方支援を実現。
 - － フライヤーの「市民だより」等への挟み込み配布や、域内小学校等への配布協力
 - － 実現に向けた「ガバメント」クラウドファンディングとしての協力
- 地域一体型オープンファクトリーの実施と平行して、別事業(商品開発事業、移住・定住促進事業等)として計画し、共に集客効果のある取り組みを同時開催する仕組みを構築することで相乗効果を促進。(YAOYA、CRAFTTHON、産地の合説 等)
- 地域内で行われる取り組みに適したアワード情報の提供や申請に際する協力、メディア発信への協力、等。(各事例紹介頁に記載のアワード等)
- 行政保有の会場や、資産（マイクロバス）などを活用した事業協力。
 - － フォーラムイベント会場の提供、プレ開催時のテストツアー、期間外の域外企業とのマッチングツアー等にて所有マイクロバスを提供、職員のアテンド協力など
- 資金面以外での直接的支援(人的資源)の実現。
 - － 「地域おこし協力隊制度」を活用し、キーパーソンを市で雇用し、実行委員会の中核として活躍してもらう
 - － 「ボランティア」「インターンシップ」の募集を市が行い、事業先としてイベントの作り込みに加わってもらう
- (その他) 企業版ふるさと納税の活用（寄付の使用用途として関連事業に活用）等

ナレッジシェアの推進に向けて

「産地の顔」が交わり生まれる 「知識移転」

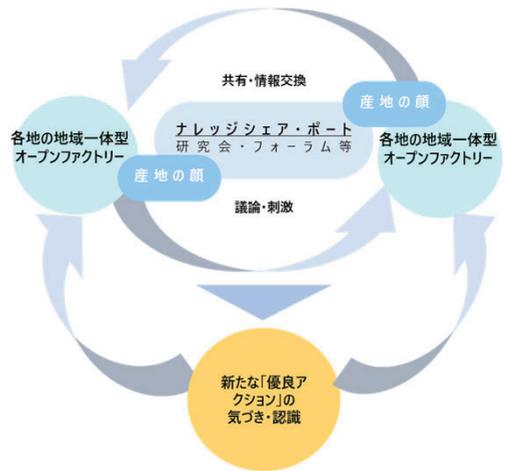
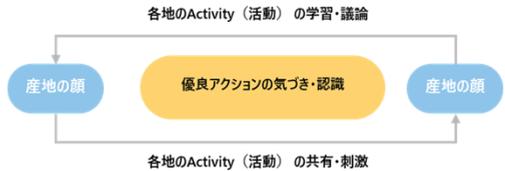
本事業にて開催してきた研究会・フォーラムは、各地域一体型オープンファクトリーの活動を他地域と共有し、学び合う場として機能してきた。研究会委員・イベント登壇者においても、他地域や他者による客観的な視点加わることで、「優良アクション（グッドプラクティス）」の認識・気付きにつながっていることも明らかになった。

また、各地の地域一体型オープンファクトリーには「産地の『知っている人』を知っている人」、いわば「産地の顔」が存在する（※）。本調査事業内で実施した研究会・フォーラム等のイベントは、まさに「産地の顔」同士が交わり、交流する場であり、産地間を越えた各地のActivity(活動)の「共有・議論・学習・刺激」を通して、「優良アクションの気づき・認識」とともに、「知識移転」が生じたものと考えられる。

（※）引用元：京都橋大学 経営学部 経営学科 准教授 丸山 一芳氏による基調講演『オープンファクトリーによる産地革新の越境と知識移転』（関西オープンファクトリーVol.9）

ナレッジシェア・ポートの重要性

ナレッジシェア推進に向けては、各地域一体型オープンファクトリーの個々の活動の分析とともに、それら活動が「優良アクション（グッドプラクティス）」として認識・気付く、あるいは共有し合う仕掛け作り、すなわち互いの経験値をフラットに共有出来る場（ナレッジシェア・ポート）の設置・推進が有効である。他地域に展開された活動が、今後新たな優良アクションを生み出す可能性もあり、「場」の創出がイノベーションを生み出すエコシステムとして機能することが期待される。



HUMAN VISIT



ヒューマン・ビジット 試行事業

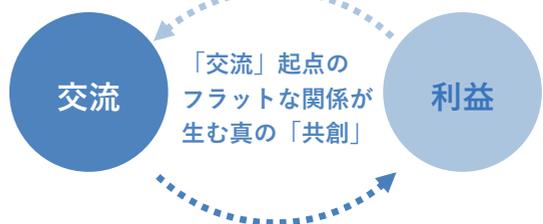
京都、貝塚・泉佐野、堺、八尾での試行事業に延べ40社に及ぶ大企業群が参加。

神戸大学大学院システム情報学研究所 准教授 藤井 信忠氏を座長に開催した研究会では、テクニカル・ビジットの意義、大企業等と企業や地域・産地との共創の可能性、認知や共創につなげるにはどのような現場体験が有効かについて議論。研究会を通して、「雑談」と「余白」の重要性、その相手が「誰」であるかが重要という仮説のもと、各地のキーパーソンといえる方(※)と共に訪問することを軸に実証調査を実施。

(※) 結果として前頁にて言及の「産地の顔」と同義。
DESIGN WEEK KYOTO、貝塚オープンファクトリー、FactorISM(堺)、みせるばやおをプロデュースする地域の「顔」がコーディネイト。各地域3~4箇所(工場・工房)を訪問し、訪問先の事業者と一緒に振り返りの機会を「セッション」として設けた。

真の「共創」を生む「交流」の場となる可能性
パートナーへの理解と共感
フラットな関係は、「交流」起点から生まれる。

大企業では、企業内に「共創部門」等を創設するケースは多いものの、その共創相手として想定する地域の企業について効果的に知る術に苦心している。また、「利益」が見えないと行動に移すことが社内的に難しいというジレンマも抱えている。



意識の壁を突破する「越境」の場を生み出す
「行政の行動」の重要性

各地で展開される「オープンファクトリー」は、共創に向けた最初の出会い、パートナーとなる中小企業群の存在認知の機会となる。そして、今回試行した「ヒューマン・ビジット」を通じて「この人、この企業となら一緒に何かできることを考えたい、考えられるではないか」という共感・信頼につながる「意識の壁」を突破する機会となった。その源は、まぎれもなく“人”であり、経営者や働く人たちの仕事に対する「誇り」、そしてそれを自らの言葉で語る姿を見ることで実感された。

こうした機会が行政の音頭で用意されたことは、大企業の方も社内への説明もしやすく参加が容易だったという声もあり、真の「共創」を生む有効な手段と言える。

“共創”
段階

大企業がオープンファクトリーに参画している中小企業等を「イコール・パートナー」として、様々なコラボレーションが生じている状態



意識の
「壁」

「ヒューマン・ビジット」
で突破

（「産地の『知っている人』を知っている人」＝「産地の顔」と交流する）

“貢献”
段階

オープンファクトリーとの接点を有しており、協賛やスポンサーとして、活動に協力している状態



認知の
「壁」

「オープンファクトリー」
の実施と発信力強化で突破

オープンファクトリーとの接点がまだ存在しておらず、認知すらしていない状態





経済産業省近畿経済産業局

総務企画部中小企業政策調査課

〒540-8535 大阪市中央区大手前1-5-44

TEL: 06-6966-6057

MAIL: kin-chushokigyoseisaku@meti.go.jp

HP: <https://www.kansai.meti.go.jp/chushoresearch.html>

2022年3月 発行

※掲載内容・画像の無断転載・複製を一切禁じます

